名古屋工業大学

柔道部文集

心技

第三号

名古屋工業大学柔道部の「心技」について

創刊号・第２号：S39 年発行（原文不明）主将：真弓　雅彦(Y41)
第３号：S40 年(ガリ版印刷をワープロに変換)　池田　高明(Y42)
第４号：S41.6　矢倉　日出男(B43)
第５号：S42.11　辻　伸彦(B44)
第６号：S43. 6　OB 記事あり　浜本　利彦(B45)
第７号：S44. 7　久野　道夫(A46)
第８号：S45.7　鰐部　重久(Es47)
第９号：S46.8　岩佐　誠司(C48)
第 10 号：S47.7　寺倉　幸雄(Mb49)
第 11 号：S48.7　川崎　恭史(C50)
第 12 号：S49.7
第 13 号：S50.7
第 14 号：S51.10
第 15 号：S53.3
第 16 号：S54.4　OB だより(又井先生他９名)　加藤　勝久(C55)

目次

柔道部々集に寄せて　前主将　Y4　真弓　雅彦
新に　主将Y3　池田　高明
柔道部を振り返って　元主将　望月　茂
卒業にあたって　OB　藤井　守浩
中学の頃　Y4　村井　暹
愚者のたわ言＝経済白書＝旧会計　D4　末利鋏意

文芸
雪と坊主　C3　鯉谷　信夫
男が階段を上るとき　D3　杉山　倫一郎
《創作》山沢信夫の柔道暦　Y4　海老沢秋生

春夏秋冬　生活随想
この頃思うこと　C2　松井　裕
左右対称―顔―　C3　三村　雅彦
食べ物　C3　原　彪
大学に来て　M2　堀内　満
火曜日の独語　K2　竹中　邦興
柔道一代（年）　K1　兼松　克司
雑感　C2　山中　鷹志
ザコ（原題・雑考）　C2　千羽　周作
うた　（作詞・作曲）　C3　山崎　隆昭

エピソード「走馬灯」　C3　船越　洋一
大衆風呂　A2　薬師寺宣安
ある対話　C3　松山　正之
編集後記　松山　正之

柔道部々集に寄せて

Ｙ４　真弓　雅彦

“趣味の柔道から脱却せよ！“

『柔道の醍醐味は？』と尋ねられたら自分は即座に『試合にある』と答える。

何故なら、そこには自分一人の“力”に託される全てがあるからだ。我々は、自分の日頃の努力を発表する時、大きな喜びを得る。柔道においては、その喜びは「試合」に代表される。従って、「試合に負ける」ということは努力不足、肉体的未熟、精神的不足など、柔道の分野におけるすべての敗北を意味する。

柔道は個人技であって、一対一の男の闘いであるから「試合」に「勝つ」事意外に何ら喜びはない。しからば「勝つ」には何をするか。それには、すばらしい言葉がある。「努力」という二字が。この二字を読むだけでなく「自分が柔道着を着て、相手と闘いをするのだ」と思ってほしい。

小生の持論から云うと「柔道とは身体で覚えるものである」。従って断続内日々の練習が大きく物をいう。その結果として、マスターされた「技」を試合に集約する時、我々は最大の喜びを得るであろう。無論「勝利」に集約すべきである。

以上「試合」に勝つと観念を通じて、「趣味の柔道を配す」という趣旨を読み取って頂きたい。

ややもすると「趣味の柔道」に陥りやすい我々柔道部、否、全日本の若いスポーツマンが趣味のスポーツに陥りやすい傾向を憂慮しつつ、この文をしたためた。

最後に、我々名古屋工業大学柔道部が「強く」なることを大いに期待します

新たに

主将　Ｙ３　池田　高明

新にスタートした工大柔道部は、これから一年間次の抱負をもって進もうと思う。第一に。合理的練習による技術面の向上である。はっきりいえば、我々の如き体格でもって立技を主としたいわゆる華やかな柔道だけに頼っていては駄目であろう。身体づくり・精神修養を目的として柔道をしている我々だが、柔道もやはりスポーツ。試合に臨めば勝利を願う。少なくともエンジニアを目指す我々は、頭脳的プレーによって勝利を掴もうではないか。

第二は、ミーティングによるクラブ内の親睦を深めることである。「道場へはただ柔道をしにくるだけ」でば、せっかくのクラブ生活も無意味である。招来に夢多き我々は、日常生活のうちに色々と悩むのは当然であろう。そうした我々同志がディスカッションをすることにより少しでも意義ある学生生活を送ることが出来るようにしたいものだ。

我々柔道部員は、お互いになんでも話し合えるベストフレンドでありたい。また、クラブを運営していくのはクラブ全員であることを忘れてはならない。それ故ミーティングによって日頃の練習に感じたことで意見をかわし合い、工大柔道部をより一層すばらしいものにしてゆきたいものだ。

柔道部を振り返って

望月　茂

文章を書くのは苦手だが、僕なりに思いつくままに書かせてもらおう。

いよいよ卒業も間近になり名工大に入学した一年の頃から現在までを振り返ってみると、柔道部というのはぼくの大学生活の大きな部分であった事をつくづくと感じ、柔道部というものが、ある時は、僕の生活規律をきちんとしてくれた事に感謝する。名工大に入学し、すぐ柔道部に入部し、そこで知り合った愉快な先輩、同輩、後輩の皆様ぼくらと浴付き合って頂きありがとう。大学四年間柔道部には色々な思い出があった。

一年生の時は夏の国立大戦は静岡で行なわれた。選手一同名古屋から鈍行で静岡に行き、市内の小さな旅館で二泊した。静岡はぼくの故郷なので、久し振りの夏休みの帰省で懐かしかった。それからコンパもたくさんあった。一年の時の初めてのコンパ（多分五月頃だと思ったが）の時、木村隆先輩と知り合った。木村先輩は、ぼくの艶歌調の歌に聞きほれたのか、ぼくの飲み振りに気に入ったのか、お互いにえらく気があった。木村先輩が卒業された今日でも付き合ってもらい感激の限りだ。

二年生になり、ちょっと柔道にも飽きが来た。というのは今思うと直接柔道が嫌いになった訳ではなく、自分の生活にスランプが来て、その為色々なことに八つ当たりしたくなったようである。しかし練習をさぼったりしなかった。そのうちに練習を一生懸命やっているうちに、そんなスランプなんか忘れて明日に希望が湧いて、一歩自分が成長したように感じた。

二年生の十二月に役員引継ぎがあり、ぼくがキャプテンをやらされた。今までは先輩の後にくっついて責任もないし、ようするに無責任でいられたわけだ。自分がキャプテンに命ぜられたとき、初めて責任の重大性を悟った。小笠原前キャプテンが、今年一年はまず生活の第一に、柔道部のことを頭におけといわれた。ぼくは引きうけた以上は今までの伝統を穢しては先輩に申し訳ないと胸一杯になり、他の役員の力を借りて、自分なりに一生懸命頑張ったつもりだ。

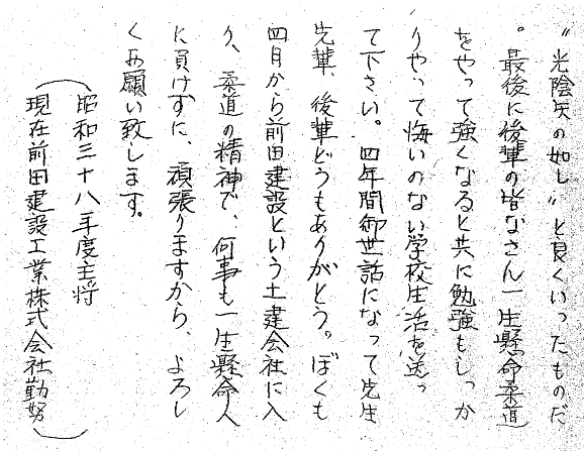
三年生になり進入部員の勧誘も始まった。良い一年生が沢山入ってくれと思ったら、希望通り一年生がゴロゴロと入部した。初めは余り多くて練習の時、三回位にわけてやらなければならず、試合も近いし、選手の練習が出来ず頭を痛め、有難い悲鳴を上げた。五月の合宿の時なんか、道場に四～五十人泊まり満員であった。自炊をしようと思って駅裏で鍋や釜を買ってきて一年生が交代で炊事当番をやってくれた。

夏の遠征で東北地方に旅行に行ったことも、とても印象に深かった。柔道部員三十数名と名古屋から夏のバカンスの旅に出た。ぼくは割合りょこうしないので良いチャンスでもあった。行き先はまず仙台である。重松マネージャーが綿密に計画を立ててくれたので、気楽なものだった。仙台で三泊位して秋田に進行した。名古屋で周遊券というものを買ったから、そのキップで東北地方ならデッカイ顔をして汽車に乗れた。秋田で二泊した。そこでコンパもやった。その所で解散して各々行きたい方面に散らばった。ぼくは青森まで行き、もう金もなくなったので帰った。なかなか面白いたびであった。冬になり、寒くなると練習に来る人が少ないので頭に来たことも何度かあった。少々の用事で練習を休むのは人間的にもだらしのない人が多いのだと、ぼうはそう思っていた。何事でも遣り出したらキチント最後まで続けるという事は大事だと思う。こんなことをいうと議論を吹きかけてくるうるさい奴もいるけど、善悪は別にして、何事でも遣り通すという精神だけはある意図は思わぬ。

四年生になり、柔道部とも引退した形となった。三年のときは忙しくマージャンなんかも余りやらないでいたので、少しマージャンをやり始めた。なかなか面白く少しとりこになってしまった。四年の前期は割合

と暇だったが、後期に入り卒論をやり始めるとけっこう忙しい。そして大学生活のしめくくりをしようという気もあり、残された少しの学生生活を立派にやろうと最近になって考え始めた。今思うと大学四年間というのは早いものだとつくづくと思う。何事でも明日がると思うと、すぐ月日がたってしまう。“光陰矢の如し”と良くいったものだ。最後に後輩の皆さん一生懸命柔道をやって強くなると共に勉強もしっかりやって悔いのない学生生活を送ってください。四年間お世話になって先生、先輩、後輩どうもありがとう。ぼくも四月から前田建設という土建会社に入り、柔道の精神で、何事も一生懸命人に負けずに、頑張りますから、よろしくお願いいたします。

（昭和三十八年度主将　現在、前田建設工業株式会社勤務）


“光陰矢の如し”と良くいったものだ。最後に後輩の皆さん一生懸命柔道をやって強くなると共に勉強もしっかりやって悔いのない学校生活を送って下さい。四年間御世話になって先生、先輩、後輩どうもありがとう。ぼくも四月から前田建設という土建会社に入り、柔道の精神で、何事も一生懸命人に負けずに、頑張りますから、よろしくお願い致します。
（昭和三十八年度主将
現在前田建設工業株式会社勤務）

卒業に当たって

藤井守浩

自分が柔道を始めたのは高校時代であった。ノッポで知恵なし、おまけにガリガリ、そんな自分にせめて肉だけでもつけて、ガッチリとした身体にしようと思ったのが柔道をはじめた同期だった。だが。高校大学を通じて、この願いは叶えられず。ノッポ、知恵なし、ガリガリの状態で社会に出て行こうとしているのです。しかし柔道をしたことにより自分の欠点を明確に把握し、練習を通して、事故の欠点をなおそうと努力し得た事は非常に良かったと思っています。高校時代における昇段試合、対校時代はいつも消極的になり、自分の持てる力を十分に発揮できないという欠点を知りなんとかしてこの欠点をなおそうと思い、練習の時には自分から技をかけ、なんとか積極的になろうと努力したのです。しかし高校時代にはこの欠点は直らなかったので、大学に入っても柔道を通じて、この欠点をなおそうと思ったのです。大学で柔道部に入部して間もなく黒帯をしめる事が出来るようになり、これを機会に自己の欠点をすこしでもなおそうと練習に励んだのです。しかし二年になって腎臓を患い練習してもすぐ疲れ、疲れがなかなかとれないので練習も休みがちになり、今までにもまして消極的になり、自分自身の殻の中にとじこもるようになったのです。だから三年の指導的立場になったときにも練習から練習へと部員の方々には勿論、自分自身さえも引っ張って行く事ができず、自分の考えとは正反対の結果となったのです。三年の終わりに二宮、木村両先輩の労をいたわってコンパを催した時、二宮先輩が三年一同の長所短所を並べられた時、自分に対して殻にとじこもることなく、もっとバカになって皆とつき合うよう言われたのです。先輩は自分の欠点をなおしてやろうと努力されたのですが、自分の努力がいたらず、大

学時代にもついになおらなかったのです。だから実社会に出ましても先輩のいわれた言葉「バカになれ」を常に感じて自分の欠点をなおしていくつもりです。最後に四年間お世話になった先生、先輩、部員の方々が柔道そのたあらゆる機会を通じて人間的に成長されることを期待しています。

（昭和四十年三月土木工学科卒業　　現在、熊谷組勤務）

中学の頃

Y4　村井　暹

中学の頃は面白いやつが沢山いた。修学旅行の時の事であった。京都の鴨川のそばで宿った時であったと思う。夕食前うとうと寝ていたWの男根を出して我ら数人でながめていた。そしてそれをほめていたところ、担任の独身女教諭A先生8といっても御年は五十に近かった)が見えて、「あれ、出とるがね。そんなことしとったら、かぜ引くよ。」といわれて、金縁の眼鏡の奥から柔和な目を笑顔につつんで言われたのを思い出す。それ以後Wには毒松(毒松茸の略)という照合をたてまつった。

Kはどんな悪事をしていたか思い出せないが、我々の総大将という感じで、腕は立つし頭も良かった。彼は三谷水産から日大へ進み、今では東京に勤めている。Tも頭がよかった。やつの家は百貨店をやっており、ただ一人の男の子であったので、わがままで、ガキ大将であったが、弱い者いじめばかりしていたので、評判はよくなかった。八百屋の息子Eは、これも横着なやつであったが、一年のときであったか、担任の女教師になぐられたので、逆になぐりかえしたのを覚えている。向う気の強い男手あった。同じく八百屋の息子Nは一同の中ではおとなしい方であった。けんかもほとんどしなかった。しかし何となく面白い男であった。Sは俺と同じくオヤジが戦死したので,一緒に東京の靖国神社へいったこともある。そんな時にはひそかに角ビンをもってきたりして、イキな男であった。ある時学校のそばで土方同士がちょっとした、あいさつの行き違いから、なぐりあいになったことがあった。そして土方の一人が鼻から血を流してたおれてしまったことがある。その時、隣の組のBが「村井、あいつらはなあ、なぐられる時こう手をひねるから、あんな風になるんだ」といった。Bも図体が大きく腕の立つ男手あった。こういったBの言葉がきのうのように妙に印象に残っている。こういった連中の間で、もまれてきた自分にもケンカの重いではいくらでもある。喫茶店でどこかの学生と、百貨店でジャリ高校生とやりあったこと、パチンコ屋でむかついて隣の光陰と、ジャン荘で余り安上がりする上のヤツと等々……。

しかし最も印象に残っているのは隣の若主人と口論になり、やったら案外口ほどにもないやつで、俺の右ストレート一発で顔面に決まりダウン。一週間ぐらい頬をはらしていた。この時、おふくろが青くなり、饅頭を買ってあやまりに行ったのを思い出す。これ以後、俺は横須賀では絶対手を出さない事を心に決めた。

またある時、家へ帰る途中名古屋駅のプラットホームで並んでいる時であった。二十七～八の体格のいい男が俺の前を横切ったことから、どちらが先にガンを付けたが知らないが、とにかくプラットホームの売店の前へ行った。俺に目を付けるほどだから相当の者だと警戒して、色々やり合っていたら、相手の人は愛大の空手部の先輩だということが分かって、ことらは以後だまってしまった。学生のくせに、横柄な態度をするなといって、十分間位緒声で説教された。皆が見ているし、あのぐらい恥かしいことはなかった。説教し終わると、その人は、さっさとその場から姿を消した。その退き際がよく,男の野郎をあんなにカッコいいとおもったことはなかった。予断はさておき、今では知もとのヤクザにな

り、カアチャンをもらって屋台をやっているKがいた。今では六尺の大男でガッシリしているが、そのころはヒョロヒョロした子男であった。しかし、向う気は強かった。委員のBはその頃から人格者であった。今では名大の医学部におり、もうそろそろ卒業するはずだが、昨夏に十五万位で東南アジアを回ってきたそうだ。彼もなかなかやり手だ。あれ以後、EとNは自分で八百屋を切り盛りし、なかなか繁盛している。Wは駅裏へ潜入し人さらい飯場事件で新聞をかざったが、今頃はもうムショから出ているかもしれない。自分が柔道部へ入ったのもNの震源によるもので、「空手をやるか、柔道をやるか」迷っていたところ、「お前はヒョロヒョロだから柔道をやれ」とのおつげがあり柔道をやり始めた。あの頃は女の子としゃべったりする事は悪事の様に考えられ、女たらしとみなされたものだ。バンカラな気風であった。自分もたぶんにその影響を受けている。我々の組はこんなガキ大将ばかりであったが、みな一国一城の主の様な顔をしていた。こんな野郎どもが個性を失わず生きられる学園であった。古きよき時代で亜あった。十年ほど前のことである。―終―

愚者のたわ言　＝経済白書＝旧会計

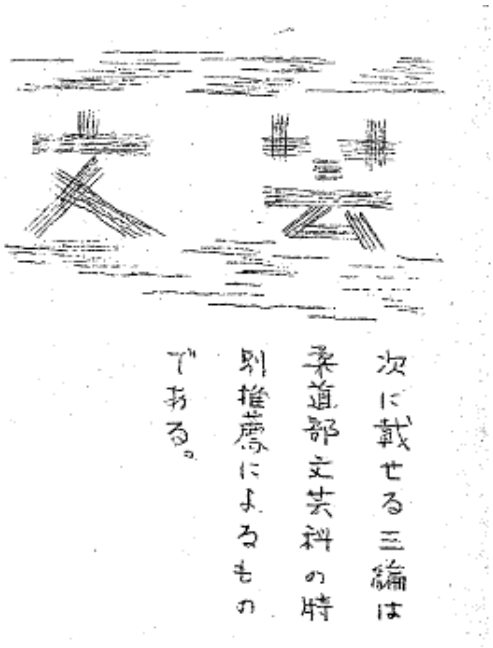
D4　末利鋏意

ある日突然会計になった。小生はえらいことになったものだと嘆いた。その後で観念した。今年からOB会費、部費、入部非共に値上げである。まず新入部員に入部費を請求した。とたんに、苦虫をつぶしたような顔をして「ハア、今持合せがないもんで…」。次の日には持ってくるだろうと思ったが、待てど暮せど現れない。現在二年生部員が少ないのは案外こんな所に原因があるのではないだろうか。と多少自責の念をもよおさないでもない。ともかくも部に留まった新入部員達は会計として最も愛すべき存在である。ところが部の内情をつかみかけた者はなかなか手強い。巧みな理由を言っては引き延ばし戦術をとる。中には逆に部費を借り出す達人も出る始末。さらに「あの手この手と誘惑の手を差し延べる者、ついうっかり、良い気になって乗せられたこともあった。そこで思案を巡らした。

冬の寒稽古に始まり、部集第二号の発行、春は岐阜瑞浪の合宿、新入生歓迎合宿、全国国立大戦、東海国立大戦、夏の二回の合宿、特に北海道への遠征、秋の第一回OB会、国立五工大戦、冬の東海学柔連冬季大会に終った。行事多き1年間だった。

	O.B.会費	自治会費等	部費	総活動資金
35年	5200	8000	25100	43000
36〃	7700	13000	23800	63000
37〃	11000	15000	34000	72000
38〃	20500	14000	42700	82000
39〃	37200	20000	62000	132000

ここで数年前と比較してみよう。次表のごとく過去五年間の間順調に伸びていることがわかる。特に三十九年度はOB会費を納めた先輩数が増加した事と、一人当たりの金額がましたこと、又部費も月二百円にした事による増額がめだっている。総活動資金では三十九年度の経済成長率六十％で日本の経済成長率をはるかに上回っていることがわかる。なお、次表にはくわえられていないが、国立五工大戦で十万円の収支が合ったので、これを加えると総活動資金は二十三万余円ということになる。積立金制度もその一つであった。もっとも小生とて学生の経済状態の如何なるものか、自分を振り返って理解できぬでもない。ある部員が小生の顔をまともに見づらい、といっていたが、この言葉は会計として満足のいたりである。



＝雪と坊主＝

C３　鯉谷信夫

今夜の底冷えは厳しい。夕方から降っていた雨は雪になったらしい。真乗院の障子を開けると、庭先は真白に化粧し夜が明けたようである。濡れ縁にでれば南禅寺の山門も白く、黒い東山を背景に浮き出されている。近くを流れる疎水の音も寒々と聞こえてくる。すぐ部屋にとって返し囲炉裏をはさんで、住職と湯どうふを食べながら杯をかわすと、原のそこから温まってくる。以下は酔いにまかせて住職の話したものである。

　およそ重大な事件が無事行なわれるためには、それにふさわしい「時」と「場所」が必要である。若いうちはとかく間違った方向へ走りがちであるが、学問にしろ恋愛にしろこれは大切なことである。これは今飲んでいる酒にも言えることである。しかし酒というものは「時」と「場所」が許せば、ばか飲みをして良いかと言えばそうとも言えないものだ。酒について君たち若い人に少し話そう。酒は天下の美禄である。適量の酒は人を陽気にし、陰気を隠し、食欲を増し、うれいを去り、その他多くの益があるものである。しかし反対に度がすぎれば又多くの害のあるものであることは君達も承知のことだ。丁度、火や水が我々人間に大変やくにたつものであるが、量が多くなると人に禍を与えるのと同じである。折角の天下の美禄も人に害を与えたり、又己の命を落としたりしてはつまらぬことである。鼻は半開が、雪は降りはじめが見ごろである。花は満開になると散る心配をしなくてはならない。雪もつもってしまえば表面を人馬によって汚されるし、又いつかはとけて流れ去るものである。何事も見つれば必ず欠けるのである。満月は毎日見ることはできないとは幼い子供でも知っている。これと同じように酒はほろ酔い程度が飲みごろで明日に楽しみも生まれてくるのである。

　ここまで話して住職は酔いがまわったのか囲炉裏に足を投げ出して寝てしまった。毛布をかけてやり、障子を開けると雪はすでにやんでおり、東の空も白んできた。やがては、この雪もとけさるのであろう。今の内にこの美しさを十分に楽しんでおこう。

男が階段を上るとき

D3杉山倫一郎

彼は早くから父にしなれ、母に甘やかされて育った。……。

芦辺寮のM号室。その部屋はなんとなくじめじめしていて暗い陰気なムードが漂っている。汗臭い万年床はねずみがすんでいそうだ。タバコの吸殻が畳の上におどっている。汚れた衣類の山。線のきれたギターが肌寒い薄茶色の壁にかかっている。寒々とした太陽が窓ガラスの埃を城っぽくしている。殺風景な本箱の中にまだ手をつけたことのない教科書が逆立ちしたまま埃をかぶっている。目覚まし時計がにぶい音を出してなりだした。万年床から手が伸びてその音をけした。午後の三時。三時という時刻は何をしようと思っても遅すぎる。あるいは早すぎる時刻だ。午後の奇妙なひととき。彼の生活はここから始まる。といっても今さら学校に行って授業を受けるw家ではない。柔道の稽古にでかけるのであった。彼は勉強など全然せず、その上、ものぐさな性分で、とんとだらしがなかった。顔はいつも半月も洗わず、よほどムズムズせぬ限り風呂も御免こうむった。もう長いこと気ままにやっていて、コセコセするのが大嫌いであった。諸事に付けておおまかで代の作法に背き万事なげやりでいい怠け者であった。応用力学の単位をおとしてからは放埒に輪をかけ、昼はpくぁ賃子、玉突き、夜は今池のバーを飲み歩き、毎晩のように徹麻をした。高校時代の彼を知っているものにとっては、現在の彼の変わりぶりは信じられない者があった。……。

「栄えある合格を祝す」彼は手にした電報を何回も喜びをかみしめながら読み返した。彼の胸は熱くなり何か激しくせまるものがあった。一年間の苦労がやっと実を結んだのだ。彼はすぐにK子のことを思った。K子の嬉しそうな顔が彼の脳裏に去来した。高校卒業以来始めてK子に会えるのかと思うと無性に興奮してきた。しかし合うのがまた不安でもあった。彼は昼食を済ませてから、浪人時代によく散歩した北野神社にやって来た。悠然とした彼の素振りは他のものを寄せつけなかった。それは勝利者の名誉ある行進にも似ていた。足どりも軽く，砂利の音もいつになくリズミカルであった。以前はなんとなく恐怖心を抱かせた境内の雰囲気も今日は格別清々しく神秘的な匂いを醸し出していた。木々の間より漏れくる太陽の光もひときわ彼の前途を象徴していた。彼は人生の一ページに輝かしい金字塔を打ちたてたのだ。彼は神殿の前へやってきた。古びた神殿は色褪せていたけれども新鮮味があった。彼は今日まで女で一つで育ててくれた母に対して感謝の気持ちを捧げた。目を閉じると昨日までの精神的肉体的苦労が連鎖して想起された。思わず涙が込みあげてきた彼はぐっと原に力を入れて耐えたが、彼の理性ではどうすることも出来なかった。涙は間断なく頬を伝って流れ落ちた。彼は涙がこれほど美しくつめたいものであるということを初めて知った。彼はしばらくその場にたたずんでいた。そして木々の茂ったところから芝生のある色彩豊かな日当たりのよい場所へとでていった。日曜日。家庭的なひびき声。自動車の唸り声。ひとの叫び声。犬の吠える声。それらは暖かい場所から聞こえてきた。彼と行きかう人はみな彼の栄誉を称えているかのように思われた。そう感じて彼は得意満面であった。彼は今日は人生における最良の日だと思った。彼は古池に沿って砂利の多い広場へと足を運んでいった。彼の態度には微塵の不安も感じられなかった。まさに英雄の凱旋であった。彼の前方に一つの集団が近づいてきた。それは結婚式場に向かう人々であった。太陽を背に向けて悠々と歩いている花嫁の姿が彼の目をとらえた。彼は近くによって、人垣の間から美しく着飾った花嫁に視線を送った。

突然、彼の背中に旋律が走った。彼は自分の目を疑った。急に目の前

が暗くなった。自分の体が閉じられ、内臓が拳固のように固くなり、もはや自分の肉体が感じられなくなった。非常な足音を残して人々は去っていった。時の経過が長く感じられた。彼は一人ぼっちになった。急に風が冷たくなった。砂利の上に投げ出された自分の影法師もやけに感傷的であった。彼は弱々しく石をつかむと思い切り山のほうに向かって投げつけた。かすかな抵抗があった。カラスが一羽彼の頭の上を飛んで消えていった。彼は頭を後ろにやって空を眺めた。空は青く清しかった。空は女のようにやさしかった。忘れられたような太陽はけちけちしたもっともらしい光を落としていた。太陽は残酷だ。欲望とは腹の中の乾いた太陽のことだ。地上の愛はすべて空に上ってしまったのだ。……。

かくて彼は栄誉の心は日々に崩れ、ただ、己にのみ真実ならんとの新年が強くなっていった。彼は敢えて苦しみを求めようとした。柔道によって己を見出そうとした。一年の歳月は流れようとした。いまや彼は柔道の鬼と化した。来る日も、来る日も彼は道場を独占した。彼の必殺技は多くの部員を傷つけた。部員は尾に軍曹といって彼を恐れた。もはや実力では彼の右に出るものはなかった。彼は柔道の中に生きているといっても過言ではなかった。彼はあるとき

柔道部誌に河合栄次郎先生のことばを後輩に与えた。そのことばは彼の人生観を形づくっていた。「青年らしさとは何か。それは高きものへの憧憬、価値あるものへの感激、深いものへの魅惑、魂を震わすものへの涙だ。浮世を渡る巧拙は浮世の玄人に任せてもいい。やがて浮世の苦労がそれを教えてくれるだろう。」素朴な道場にも夕闇が迫っていた。彼の力強い掛声だけが闇の中へすいこまれていった。　―完―

【創作】

山沢信夫の柔道暦

海老沢秋生

（一）

彼が柔道を知ったのは小学校の時である。姿三四郎、これが彼の柔道の知識であった。しかしその頃の彼の記憶は曖昧であった。ひょっとすると漫画の「ダルマ君」が最初だったかもしれない。しかしそんなことは彼にとってはどうでも良かった。もっとも彼が柔道を十数年続けることになったんだが、その最初の動機が重要なものであって今でも彼はそれをしっかりと知っている。

それは彼が小学五年の時のことであった。彼は運動は得意で体育の点は「五」を通していたし、相撲でも彼より年長の者でも負けない自信があった。走ればいつもリレーでは選手だったし、学校でもエリート集団に属していたし、大いに餓鬼大将でハッスルしていた。

S嬢、彼女は彼の近所に住む同年の女の子、母同士が良く行き来していた関係上よく彼女の家に行ったが、なぜか彼女とは遊んだ記憶がないし、話をしたような記憶もない。二人とも気が強かったからです。覚えていることといえば彼女の目の下に小さな黒子があり、彼女は色が白かったので、それが不思議とよく目立ち腕白小僧が「やい！なき黒子！」とよくはやしていたことである。そんな時は彼女は心持ち顔を紅潮させてそんな者等は無視するかのように歩き過ぎていった。目が大きく彼の記憶によれば赤いセーターを着て、少し長めの三つ編みになったおさげの髪を前と後に垂らしていた。

彼は彼女のことを記憶しているつもりは無いが、彼女が彼の柔道への

道の主動機になったことからして大いに意識していたのかもしれない。その秋の文化祭の日、彼の小学校の運動場でも文化の祭典が開催され、その意種目として柔道なるものも協賛していた。彼が何の気なしにそれを覗いた時、前の方で熱心に見ている彼女を認め、あまり興味を持っていなかった、この柔道なるものへ心を引かれた。しかし、そのときも彼には柔道そのものよりむしろ彼女の方が興味あるものだった。彼女は目を輝かせて熱心に見入っていた。普段彼女がそんなに熱中した所を見たことのない彼には少々驚きであった。彼女でもあんなに熱中してくれる柔道なるものを、ひとつやってやるかと彼の心の中にむくむくと湧き上がるものがあった。

彼の町には町道場なるものが二ヶ所あった。しかし、これは彼の目にも貧弱なものであることが分かる程のもので、到底彼は行く気が起こらなかった。どうせやるなら強くなり熱心に見ている彼女の前でカッコイイところを見せなくちゃ！そう思っていた。彼はそれを心に留めていて、中学入学の時、進学のよいという名目で父母を口説き落として〇〇〇市のT中学校へ入学した。即ちその学校の高校は全国高校柔道大会で優勝したと聞いていたからだった。実際彼が畳の上で柔道を始めたのは四月一日、即ち入学式の火だった。彼のその当時の計画は、中学校中に処断になり。高校ではもっと身長も伸び、体も大きくなるから算段になり、全国大会に出てやろうというものだった。

彼は一日も練習を休んだことはなかった。その学校の先生の口癖「柔道は休まず続ければ強くなる。それは一日でも他人が休めばその分だけ自分が強くなっているのだから！」を忠実に守ったことになる。しかし実際のところ彼には柔道が面白くてならなかったからだ。なるほど、上級生には全部負けるが、練習をすればする程、それに比例して強くなったし、同級生には全部勝つことが出来たからだ。今から考えれば休まず練習したことが、その原因だったと思われる。その証拠にその後他人も休まなくなる(そろそろ部員としての責任から休めなくなったから)と、それにつれて彼は勝つことが出来なくなっていったからだ。予定通りに年の暮れには初段になった。出る試合はどれも勝ち、家に賞状賞品が重なってきた。「よし！今年の文化祭には！」と考えた時、その秋からどういう理由からか分からないが文化祭から柔道が消えてしまったのである。彼はもうそんな事はどうでも良いことだと思ったが、しかし、大いに気落ちしたし、その年の冬にはS嬢も父の転勤で他に移り、生活の一ヶ所に穴が気持になった。

悪いことは重なるものでもう一つ彼を悩ましたことが起こった。それは前にも欠いたとおり、予定通りに柔道がその後伸びなくなったである。他の部員は身長の伸びるに比例してどんどん柔道も伸びたが、彼は身長の伸び悩みに比例して柔道も伸び悩みになったのである。そして投げられる数が増すに連れて練習を休む日も増し、どんどん悪い方に向いて行った。しかしここでH嬢が登場したのである。

その日も投げられ続け、体中が痛くて面白くないのでそれまでは市電で通っていたのをバスに乗ったのである。それに乗り合わせたのがH嬢、初めに見た時どこかであった顔だと思い、色々考えたらなんと映画女優のS子に似ていたのだった。彼女は彼と同じ駅までこのバス同乗した。彼は何となくこの薄暗いバスの中が明るくなるような気がした。彼女もクラブをしているのであろう。普通彼が学校を終えてすぐにバスに乗ると彼女は決まって乗っていなかった。しかし練習を終ってから乗ると彼女はいつも彼に時刻を合わせているかのように彼の乗るバスに乗ってきた。

彼の面白くないはずの練習がまた又段々と愉快なものになっていった。彼女の美しさはそのセーラー服に合ったものだった。彼は「彼女は俺に演習をさせる為に乗っているのだな。それでは」とそう勝手に決めた。しかしそのおかげで高二の時に二段になり、その学校の選手になり、全

国大会にも出場した。先生曰く「山沢は体は小さいが練習にも生活にもファイトがある。彼の強さはそれに由来しているのだ！」これを聞いた彼は内心変なものを感じた。それは彼の練習の苦しさも終れば彼女と同じバスでという安心感があったから乗り越えることが出来たのである。彼は今でも覚えている。彼女がバスに乗り合わせていない日、それは試合に負けた時と同じ程度の悲しみである。二年を通じて一度も話をしなかったし、むしろ話をしたくなかった。要するに彼は彼女の影の力で選手になり練習熱心な男というレッテルを張られた。実際彼はこの生活に満足も市、熱心に練習をした。

（二）

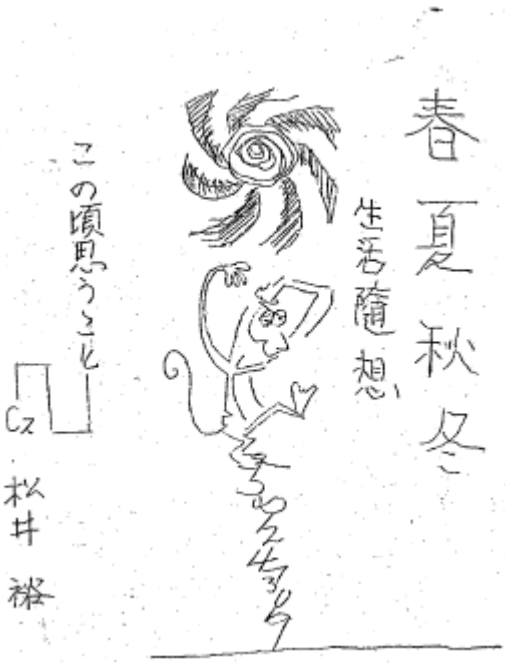
彼は今、国立△△工業大学の柔道部に入っている。入部した時のキャプテンは柔道は弱くはないがしかし、キャプテンの第一の条件である実行力、決断力に欠けていて、俗に言うプレーボーイなるものが彼の理想であるかのように行動している。そして彼は柔道よりも他に多くの好きな事を抱えていてその方に少なからず力を入れている様であった。二人在る副キャプテンの一人は風采が上がらず、部員の中では練習に多く出ているがこれが彼の取柄で他に全然それがない男、そしてもう一人を彼はあまり知らなかった。というのはその人は練習はほとんど来なかったからである。世話好きなマネージャーのSさん、ファイトのあるMさん、会計のKさん等が彼の先輩だった。彼の高校の時とは異なり部員は少なく試合は出場するだけでいまだかって勝ったことがなく、柔道を毎日するよりは麻雀なら毎日でも文句をいわない部員。合宿しても夜となれ名ひとりも部員は見当たらず、コンパと言えば大いに騒ぐ。練習は週四回であるのにそれも半分くらいしか出席せず、しかしそんなことが正しいと正当化する部員。彼も今では平和な同好会的な雰囲気に親しみ、のらりくらりと毎日を過している。柔道以外多数、興味あることを覚えた。そして色々のことが起こった。H嬢との再開、それにつれ彼の生活の全部であった柔道も少しずつ遠くへ小さくなって行った。しかしこの柔道部においても一人「部」らしきものにと精をだした人もいた。その時代に彼はそれが煩わしいものだった。こんな面白く目をして柔道を続けることは無意味な事だとも思った。好きで柔道をするのであってなにも強制されてまでもする必要はないと思った。そして大分練習を休んだ。しかしその先輩が現役を退く頃になって彼の考えは少しずつ変化し始めた。即ち「部」に入ったからにはその「部」の発展ということを考えねばならないと思い出したのである。好きで気ままにするのであるならばそれは同好会であって「部」というものはもっと厳しくあるものではないか。だから私生活を犠牲にするのではなく。私生活の内に「部」があり、姿勢駆るそのものが柔道であるのが本当の姿ではないだろうか。そんな結論に達した時、彼らの番がやって来たのだ。彼は彼なりに先輩とは異なった方法ではあるが「部」というものを発展させようと心に誓ったのである。

――エピローグ――

彼が大学に入って間もなくのころ、G市で試合が行なわれ、新入生の彼は出場した。自分の出場の時、フト窓の外を見てハッとした。S嬢が彼の目の前を通り過ぎたのである。確かめようとした時はもう姿はなかった。そのあたりは大分人だかりがあったが、そんなことは無視するかのように足早に通り過ぎて行ったのである。後から考えて彼女ではないような気もする。しかし確かにチラッと彼のほうを向いたその顔の目の下の黒子は彼女のものだった。それを見止めたので彼は瞬間かのじょだと思ったのである。しかし、今の彼はそれが彼女でないように願っている。……。

早々、その試合では彼は勝っていたんだが・

――（終）――



私達の毎日の生活は全く面白いものである。又裏面から見たら、それは面白くないことの連続である。実際私生活の連続において自分がやりたくてやり、しかも楽しく思いどおり事が運ぶといったようなことはごくまれである。多くの場合、それはたとえ自ら身をとおじた立場にあっても結果は思わしいものでなかったり、又すべて気の乗らない事をいやいやしたり、又時にはそれをする事を強いられることさえあるのである。しかし、この世は不思議な所である。毎日いやいややっている事が時がたつにつれて，何となく興味をおぼえ今までの心とは反対に今度はすすんで（積極的ではない）それに身をうちこもうとするのである。しかしながらまだこの好奇心といった様なものも何か前に障害物が生じてくればひとたまりもなく、とびちりそうな一編のかよわいものにすぎない。そんな特はもう一人の自分とその自分との闘争である。その結果今の自分が勝つこともあり、又もう一人の自分が勝つこともある。公社の場合、自分の今までやって来たことはただおもしろくなかったということで事は終ってしまうだろう。前者の場合、一片のささやかな好奇心も雪だるまのごとく随時おおきくなっていくnおである。そしてこの様なことが数十回、数百回、いや無数回繰り返された場合に、得られた何がしかの成果は美しい恋人にもまさる宝なのである。そしてそれは自分が好んでやって思いどおりの成果が得られた時にもましたよろこびを感じるのではあるまいか。

残念ながら私はまだそのような喜びを味わったことがない。又「事」を人生にたとえればそのよろこびは、あの世ではじめて味わえるものである。「事」はあるときには学の道であり、諸々の事でもある。とにかく私達の生活、人生は、それ自身このような過程をへた成果をへて得られるささやかな成果を期待して毎日毎日をすごしているのである。たとえ、その成果は吹けば飛ぶような小さなものであろうとも又他人から見ればばかげたことであろうともその人の姿は、それ以上美しいことはないのである。私はいつもそんな自分である様、心に命じ、毎日を過している自分でありたい。

顔というのは元来左右対称になっているもので、各人おのおの鼻と口を中心に、目とまゆげ、それに耳が左右に一つずつ配置されている。その数は万人共通だが形やその配置場所となると千差万別で双子といえども、どこか違っている。だからこそ美男美女が存在するのだが、ここで

はこの顔の左右対称性について述べてみる。
　ぼくが小学生の頃、担任の女の先生から、或る時、荷おっポン出一番顔が左右対称になっているのは原節子という女優で、彼女はもっとも美人だと聞いたことがある。つまり顔が左右対称であるということは美人たる一要素になるらしい。なるほど言われてみれば、少々部品が悪くてもぴったり左右対称になっていれば整っていて美しい。だが我々凡人はなかなかそうきれいに左右対称にはなっていない。現に僕など左の目は右の目より小さいし、その位置も右側よりかなり低い位置に座っている。
　しかし、左右対称な顔というのは、たしかに美しいかもしれないが、なにか人間美の少ない感じがする。女性の髪型について述べれば、ヴィーナスなどの左右対称系では整っていて清潔な感じがするし、セクシーな女性は必ず左右どちらかにポイントをおいて個性を出している。日本の仏像に例をとれば阿弥陀像などは顔に関する限り、全く左右対称でこうごうしい感じがするし、鑑真和上像をはじめに人物像の多くは人間味があふれていて、すぐ見飽きてしまう仏像と違っていくらながめていても見飽きるということはない。又仏像の中でも、伎芸天立像などのようにまるでウィンクでもしているように見える仏像では、自分が不完全であるがゆえに、相手に同調することは難しい、又時には相手をねたんだりする。反対に相手の欠点を見つけると、それまで異なった世界の人間のように思えたひとが急に好ましく思えたりする。何か卑しい感じもするがこれもおろかな人間の感情というやつだろう。顔の左右対称性ということから考え付いたことを書いてみた。

食べ物

C３　東海柔道連盟理事　原田　彪

　食べものの好みは、としとともに変わっていく様であるが、一般に好き嫌いは年とともになくなっていくようである。僕などは子供の頃に、にんじんが大嫌いであったが、この頃はうまいと感じるようになって来た。我ながら不思議に思う。
　まあ、味などは人、人の好みであるが、希少価値のものだと、うまさは倍増するようである。その例としてぼくの場合は、数の子がある。あれは大分前は安くて正月などでも、沢山食卓の上にのっていたが、その頃は、あんなものは、うまくも、まずくも感ぜず、あまり食べたく思わなかった。が、この頃のように効果になり、めったに食べられなくなると、無性に食べたくなり又食べると大変おいしく感じる。これは又不思議なことである。うまい、まずいなどということは案外いいかげんなものである。
　下宿をしていると、家で食べていたものが、非常に食べたくなる。ことにつけものなどは、長年、食べなれているためか、家のものが特にうまく感じる。一般に下宿をしていると、野菜物が不足してくるような感じである。僕はレタスにフレンチドレッシングをまぶしたものが大好きであるが、こういうものは下宿しているとほとんど食べられない。まことに残念である。これ即ち下宿生活のけっての野一つである。
　又下宿していると、どうもまずいものを食べ慣れるためか、舌の感度が落ちるようである。これは逆に言えば、うまいと感じるものが増えてくるということでもある。このことはわが人生においてプラスか、はたまたマイナスか。
（筆者、近頃、公私混同の胃拡張気味！）

大学に来て

M2　堀内　満

ほとんどの人が入試の為の「灰色の生活」で苦しんでいる。高校三年の頃、教師に恵まれ、又友人にも恵まれていた。あの頃、クラス全体が明るく、活発で、協調性のあったあの頃。

質問は勿論いろいろな問題にも教師は親身になって考えてくれた。

その頃は、僕には学校が第二の家庭のような気がしたものだ。

しかし大学に入ると、僕はなにもかもが新しい、環境への順応の仕方を模索するように懸命になり、緊張と期待が交錯する毎日を学校において送りました。

自分の毎日対面するものが、以前とは違ってスケールが大きく、無味乾燥で興味の乏しいものになりました。

時間さえ過ぎれば、さっさと帰っていく人間味のない教授たち、僕は色々なことに失望と不安を味わいました。

しかしながら、すべてこれらの諸状況の中から、僕は自分の考えが甘いこと、高校までのような、何でも他に求めるような姿勢から、自分で自分の欲するものを求めなければいけないことを悟りました。

火曜日のドイツ語

K2　竹中邦興

いやな火曜日、何故なら村田さんのドイツ語があるからだ。この火曜日の四時限にデンと腰をすえている。心理、英語の時間をつぶしてこのドイツ語の予習をあわててする。前日に予習をしておくのは稀のこと、このドイツ語がなかったら一週間は楽しくなるのに。英語でさえろくに分からないのにドイツ語なぞこの頭でわかろうか。いやな授業のすすめ方、あてられ立たされ，皮肉たっぷりとやられる。しかしこのドイツ語を毎日あるわけではないから火曜日の四時限を過ぎればドイツ語の講義も終る。ヤレヤレ終ったかとホットする。このとき、一週間が終ったような気がする。このドイツ語が休講になればクラス中手を上げて喜ぶ。皆何か得をしたような気になり、急に生き生きしてくる。まあこんなことはめったにないが、火曜日のドイツ語が休講になっていないかと、掲示板をのぞきこむのが常だ。とこんなことを欠いている内に玉子焼きがこげてしまった。どうも火曜日はついていない。

柔道一代（年）

兼松克司（金属工学科）

高校時代から僕は柔道をやりたかった。しかし色々の事情があって，大学に入ってからは、絶対柔道部に入るつもりでいた。

名工大に入り、最初背が高い為かボート部に入部を勧められ、庄内川まで試乗会に連れて行かれた。だが先輩から聞いたところが、ボート部は合宿ばかりで、全然合宿に出てこないということであったので、入部を断った。それから二、三日後。今度はラグビー部に勧められ、グランドで練習をしたが、やはり近眼の為、ボールがよく見えず、あまり活動できそうでなかったので、やはりこれも入るのをやめた。柔道をおれはやりたかったのだ。

しかし柔道部というところは、高校時代に即に、柔道をやっていて、

全部黒帯の人達ばかりで、到底だめだと思い、どうも道場に入ることが出来ず、正月が来てしまった。

今から丁度一年前、殺される思いで道場へ行ってみた。いや見る人皆、姿三四郎やイガグリ君みたいな人達ばかりで驚いたが、なにくそまけるものかと、それから一生懸命練習に励んだ。乱取りの時は、なげられてばかりで、背中の骨が、ばらばらになりそうであり、寝技の時は、すぐ押さえ込まれ、入部した当時は、下宿へ帰ってもくたくたになり、すぐ寝てしまうほどであったが、段々なれ、一年生が入り、やっと仲間が出来て、嬉しい思い出あった。

このように、苦しいながら、柔道を1年やることによって、いろいろな利点を得たと思う。その第一の利点は、ある一つのものに本当に、一生懸命、打ちこめることである。ぼくの一日の生活の中で、一つのことに、本当に打ちこめることは、ぼくにとって非常にうれしいことだ。最後に今年会計の役をやらせていただいて降りますので、部員の積極的な援助をお願いします。

―完―

雑感

C2　山中鷹志

僕も柔道を始めてから、もう八年もなり、技術的に大きくすすんでいないが、これ以外に色々と得るものがあり、やってよかったなあと思っている。

中学一年のとき、兄にさそわれるままに柔道部に入り、この柔道部が当時大阪で一番強かったし、そのやりがいと、僕の背の高いことから三年間やり、高校へ入ってからは、「途中でやめる」なんてことは絶対したくなかったので、三年間又やり、そして現在に至ったわけである。

僕は他の人のように、おもしろくて柔道をやっていない。常に不承不承やっているわけであり。だから、どんなスポーツでもいいのである。ただ最後までやり通したいのである。

そんなわけで、常に僕は客観的に柔道を見てきた。柔道マンの欠点、――これは他のスポーツにもあり得るだろうが――は、まず「井の中の蛙」的な偏見を他のスポーツや文化活動に対してもっている点である。自分のやっている柔道が一番よいと考えるのはいいが、そこから他のものを、見下げ、ケチをつけ、又は「ちょろこい」とか言うのはよくないと思う。常に安易に物を考え、行動することである。

大学生にもなって、学生運動には見向きもせず、又、苦しい練習の後は大いに飲んで、さわぐ。これでは余りにも単純で、内容のある生活とは言えない。柔道をやる一方、なんいでも手を出してみて、知る必要があるのではないだろうか。

以上のことは僕の見てきた柔道マンに一般に見られてきたものであるが、そうでない人がいるかも知れない。これから知るであろう柔道マンがどんな人か、僕はそれを楽しみにしたい。

ザコ（原題・雑考）

C2　千羽周作

僕は以前、人は何の為に生きているのかを考え、かなり深刻にじぶんというものを意識した。その時、いろいろ考えた末、そんな事は大して問題ではないのだと思うようになった。

それは、一体自分は難の為にそれを知りたがるのかという、ふと心に浮かんだ、自分への質問から生まれた人自体に感じる未知と自信に対する不信がきっかけとなって発展した結論だった。そして今も僕の心を煩わすのはその不信である。

当時、僕は自分の行動に何らかの形で確固たる根拠を欲してヤキモキしていたのだった。それは純粋な生に対する不安のみでなく、何と恥かしくも相当量の虚栄心が働いていたのだった。その事実を認めることは、他人に対する僕の高慢心の敗北を意味することだったので、僕はなかなか認めようとはせず、多くの日を費やすことになった。

そしてとうとう認めてしまってからは。治りきることもない虚栄心の病に半ば慢性的に患いながら，他人と接する羽目になったのである。だからといって今、後悔しているわけではなく、時折苦々しく思い出してはつくづく自分は要注意人物だと思ったりしている。こうなる前には、ずいぶん威勢のいいことを言ってきたが、今は過信しないように気をつけるだけで精一杯で、そのように気をくばることによって生きることにファイトを失ったりしては大変とそればかり心配している。

こんなことは長く考えても特によい効果が現れる訳でもないとは思う。むしろ逆のほうはより可能性があるだろう、しかし悲しいかな、僕はまだどこかに未練があるらしい。

未練といえば僕には優柔不断の性がある。何かを大勢で協力してやるときも、又競争にしても、浮かんでくるのは、「これでいいのか、一体これでいいのか」という声である。

僕は人と生まれてのこの世のことが不可解でならない。人間関係にしろ、物理的減少にしろそうである。

時間とは何か？　こうして僕らをひきつれていくこの力は？　又人や他の生物、無生物を含めて物体というもの全ての存在は如何なる意味を持つのだろうか？

僕は以前から絶対的なある力を感じている。僕自身のせいもしも、時間という偉大な力に追随する。「存在」から逃れることはできないのだと感じるのである。そういった、これより他に仕様のない事実を認めようとすることは、特に自分の志向がその支配下に完全にあるということのゆえに、余程、苦しく感じられる。その上、こんな考えにふけっている時にも人間関係を疎かに出来ないのだから，人であることに嫌気さえしてくる。

そしてこんな夢想めいた雑考を何度も繰り返す中に、満足し得る結論など得られるはずがないという気持がだんだんツ余暇ってくる。

そして僕はふと、子供の頃、昨日のことを思い出しては、自分がつまらない、しかも誤ったことをしている様に感じる。

そして自分はもっともっと行動すべきだ。知らぬとはいえ、自分の身体に対する理解はもたねばならないのだと思ったりする。

その時、楽しみつつ、苦しみつつ、調和を保ちながら時間を費やそうと思い何の結論も得られず、一生をおえればそれでもいいと思ったりするのである。

僕はあの様々の素晴らしい興奮を忘れてはいない。ただ、常にそうした気分ではいられないことを考え、同僚と子孫を考える時、つまらぬといえるこんな事柄も考えることをやめてはならぬと思うのである。

今、僕はぼんやり、この世の人間関係は決してはっきりとはわからず

に、わからないままに、甘ずっぱく味付けされたものだと思いながら、こんなことを考えた。

うた

C3　山崎隆昭（作詞、作曲）

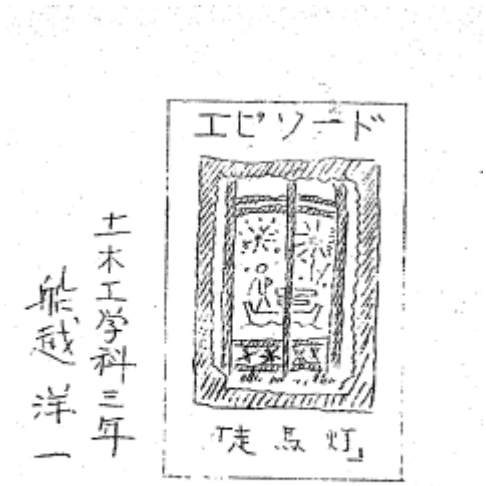
僕は歌が好きだ。小さい頃からよく歌った。小さい頃は近くの山にかけ登って、誰もいない所で、でっかい声をはりあげて歌った。田舎の田んぼ道を散歩しながらもよく歌った。人に聞かせるほどうまくないので自然とそんな場所で歌ったのかも知れない。名古屋に来てからは、いい場所がない。「下宿の片隅」……。

四畳半の狭いところで、そんなことばは不必要かも知れないけど……その柱にもたれて、セントルイスブルースを口ずさんでいるほど、この上もない満足感を味わう時はない。そして他のすべてを忘れる。厄介極まる「応力」のことも、電車の中で出会ったかわいい女の子のことも、明日の飯代のことも、……　こんな自分をロマンチストだと思い、センチメンタリストだとも思っている。

好きな子が出来た時には「慕情」や「故意のブルース」をグット気分を入れて歌って酔いしれる。フラれた時には、涙をのんで「枯葉」を歌う。僕の心の表現はいつも歌だ。歌って所詮をそんなものだと思っている。楽しくてうきうきする時には、自然とテンポも速くなる。淋しくてしんみりしている時にサーフィンリズムやボサノバリズムが飛び出したためしがない。

歌の中でとりわけすきなのがブルースだ。ブルースがどうして生まれたのか、はっきりとは知らないけれど、次に述べることは正しいらしい。昔、黒人が奴隷としてアメリカに渡ってきた頃、彼らは毎日の苦しい生活を歌で表現しようとした。しかし彼らの歌は白人の歌と少し違っていた。いくら歌ってみてもドレミの音階のミとシが半音下がるのである。それが又、実に彼らの苦しみを表現しているのです。ブルースには黒人の哀愁がしみ込んでいる。だから僕はブルースを歌う時はいつも、かっての黒人奴隷の生活を思い浮かべる。時には歌いながら涙を流すこともある。僕は黒人が好きだ。彼らに限りない親しみを感じる。例チャールズ、ナットキングコール、ルイアームストロング、マハリアジャクソン、アーサキッド等々、彼らの歌の中に一貫するあの独特の黒人ならではの哀愁に、身体全体がしびれてしまう。これからも、もっともっと彼らの歌を勉強して、歌いたい。

彼らを理解しようとして今日も歌う。僕の大好きな歌、セントルイスブルースを。



土木工学科三年
熊越洋一

文集の原稿を書くなんてことは、筆不精、創作力「零」の僕にとって、大変な難問で、辞退したいのは山々だが、柔道部文集の為とあらば、無い知恵を絞って、何とか、我が思い出のかなしき物語を語ろうと思う。

「彼」は某予備校の一年生、入試に失敗して、再出発の決意もそろそろおかしくなってくる初夏、所は京の鴨川中流付近、勉強にあきた彼は友人と河原にｙ¥立っていた。何かおもしろいことはないか、二人は午後の強い日差しに、押されるが如く、川下へ向かって歩いた。と前方の草むらの中から、一匹の大きなキリギリスが、飛び上がって、真向かい野道の上におりたった。思わず、一人が持ってい

た木刀で切りつけたが、そいつは、あっさりと反対側に消えていった。

「しまったなあ」、「下手だな」その後は注意して歩くと、今まで気づかなかったやつが無数にみつかｔｔくぁ。「よしキリギリス狩りでもするか」。

それからは毎日のように、ヒマを作っては仕事にいそしんだ。ところでキリギリスを捕まえるのは簡単ではない。経験的秘術を公開すれば、まず耳をすまして泣き声を聞く。次に風下から背を低くして声のほうに近づく。そうすれば目標が見つかるから，両手を広げて、……すれば良いのである。つまり一番難しいのは、草ムラにひそんでいいる目標を適当な距離に見つけることなのである。

毎日、せっせと狩りを行ない、あきかん利用の虫かごに収めては、出かけて働いた。

そしてある日、突然、まったく突然に、収穫がなくなった。あんなにうるさかった彼らの声一つ聞こえないのである。河原の上下流約一キロにわたる土手のキリギリスは全くふたりの掌中になったのである。これは全くウソのような本当の話である。

大衆風呂

Az 薬師寺宣平

大衆風呂に入るようになって、かれこれ十ヶ月、二十三円が決して高いものとは思わないが、毎日入るには少々もったいないように感じる。何も好きこのんで垢を蓄えるわけではないし、又はいったときのさっぱりした時の味わいを増すために何日も辛抱するといったわけのものではないが、つらつら思えば大体四・五日に一回といった割合で入るようである。

こういった統計にまだお目にかかったことがないので日本人として、人並以上かあるいは、それ以下か知る由もないが、ただ、自分の無精とヒマと清潔感とそれに、経済を考えてみれば、これでだいたい、いいのである。これ以上はいると、風を引きかねんし、これ以下だと臭いがつきかねない。

人間何日風呂に入らずにやっていけるか、試してみると、おもしろいだろうが、この記録があまりはっぴょうされていないところをみると、誰もやっていないらしい。自分の記録では五十日ちょうどである。何も記録を作ってやろうだとか、物好きでやったものではなし、入院したからこうなったのである。五十日目の風呂の**おいしかった**こと、脱皮という言葉があるが、自分もその時は、ヤゴやカニのように、一皮向いて気持ちよくなったように、感じたのを覚えている。

風呂屋は三分、「さあ裸になれ」などと言われると女性でなくとも、あまり言い感じのするものではない。嫌な感じどころか、相手を憎らしくさえ思うものである。ところがわずか二十三円で惜し気もなくパッパとぬいでしまうのは全くこれ金の力といったものだ、バンダイのおやじをのぞけばみんな裸だから、少しも気にならないのだが、しかし、本能的に隠すところはちゃんと隠している。「タオルを湯につけるな」などといっても、タオル以外にもっているものはない。まさか石鹸箱のふたを使うわけにはいかないだろう。

湯舟は五種類あり、真中に大きな丸型、その他は薬油とラジウムとかなんとかいうもの、それに電気を流したのとぬるい小さな湯舟である。電気湯は最初入ってたまげた。ガタガタと何だかくすぐられているような、ゆさぶられているような、まるで精力増強風呂といいたいような風呂だ。誰がはつめいしたかしらないが、全くふざけた風呂だ。

中はもちろんみんな裸で、大きいのから小さいのからいろいろある。太鼓腹や、ピアノ線のはり金細工のような人、干物のように裏が透けてみえそうな人、住宅地だから赤銅色をした両氏のような人はいないが、体格のサンプルにはことかかないようである。

ひげをそる時、盗まれないようガッチリ鏡に向かうわけだが、その壁は塀のようなもので隣の声は良く聞こえる。多分あっちも自分のほうを向いてそっているわけ……ではなかった。女性にひげはない。この中に相手を含めて何人がこんなことを考えている人がいるだろうかと考えたらニヤニヤしてくるというものだ。ニヤニヤしているといえば、番台のおやじ、どう見ても威厳のある顔とはいえない。しっとではなく公平に見てもしまりのある顔立ちではないようだ。しかし自分がこの光栄ある席にすわったら、こうならないとはいいきれない。環境は人の顔を作るとはよくいったものだ。

一度こういうことがあった。一番風呂で客は一人、次に自分が入った。ところがあつくてあつくてとてもじゃないが入れたものではない。蛇口を最大にうめていたら三人目が来た。ちゅうｎ縁のおやじが鼻歌混じり

に、まず例のように洗面器でひとかき、ザンブリと景気よく最初の一杯をかけた。とたんにおやじ、ぴっと尻を引いて一言「あつい」これを見ていた二人は思わず声を上げて笑い顔を見交わした。こういう時笑うのは常識エチケット中には失礼なこととされている。しかし、お互いに裸であり感じるものは一緒である。やけどをしそこなったおやじも一緒になって笑った。

一瞬流れるその場の雰囲気は全くいいものである。その他にも親子で背中を流す姿は、どこか猿にもこんな格好をしているものがあるし、又一極うなる姿ときては、天下太平をそのまま絵にしたようなものである。

デパートの特価品売場の顔にも似た大衆風呂の顔々は全く各人各様さまざまであるが、しかし他には見られない一種独特のふんいきをもつものであるその名の示すように、そこには大衆そのものの示す姿、というより文字通り、人間裸の姿が表れている。そして平等である。大きくくずした「ゆ」の字ののれんをくぐってまたくぐる間は男女の生まれつきの差を除けば社会的時差 というものが、全くなくなり、本当の大衆の姿になれるのである。

二十三円の味わいだが、これを利用する人柄を考えれば、三十二円にするなど全く酷な話である。風呂屋が申し込んで、風呂を知らない連中がそれを認める。今の世はこれだからひょいひょいと値があがるのである。

1. オイ、酒でも飲みに行かないか。
2. またか。今日は試験勉強でもするよ。もうすぐだからな。
1. つまらんことやめろよ。またカンニングでもすればいいじゃないか。
2. ……
1. いくら勉強したってな。俺やお前の一生なんて生まれた時にもう決まっているのだぜ。それなら酒でも飲んで、麻雀デモした方が、楽しいじゃないか。
2. お前の運命論か。お前の生き方は、大人の考え方と少しも変わらないじゃないか。現実に妥協してしまっている。お前や俺のように若い者が、そんな考え方をしていたら、これから先の世の中はどうなるんだ。一人一人がみな生への倦怠を感じてしまうじゃないか。そうなったら社会は「死」同然だぜ。今の大人はそういう考えなんだ。だからこそ、若者はそうあってはならないんだ。俺に言わせれば大人なんてみな扶養家族だ。もっともすべてがすべてというんではないがな。
1. やめろよ。そんなつまらない説教。俺だってな、柔道をやっているんだ。この前の試合で勝ったじゃないか。先輩や友人がみなほめてくれたぜ。お前なんかまだ白帯のくせに、早く黒帯くらいとれよ。
2. ……
3. この本にこんなことが書いてあったよ。「青年よ、決して現状に甘んじるな。地球は君のもの、その上の森羅万象はみな君のもの

だ。決して失敗に屈するな。小成に安んじ、一時の人気に瞞着されるな。諸君は過失をおかすであろう。けれども諸君が誠実にして、寛仁なる限り、また勇猛果敢なる限り、諸君は決して世間からきらわれないだろう」とな。

1. ……

――未完――

編集後記

大変おそくなってもうしわけありません。編集委員の身から出たさびゆえに印迷惑をおかけしました。新一年生の原稿も二、三部集めたのですが、都合(つつ)によりのせられませんでした。これからは大先輩にも寄稿願おうとはりきっています。どしくおよせ下さい。

最後に、先輩が増々、御発展されることを心からおいのりいたします。

松山記

心　技

第　4 号

名古屋工業大学柔道部

S41.6.20 発行

柔道論　　ある対話	Y4　海老沢　秋生
雑感	E4　薬師寺　信夫
名工大柔道発展のために　趣味的柔道から勝つ柔道へ	C4　松山正之
新入生諸君へ	主将 B3　矢倉　日出男
雀	A3　薬師寺　宣安
合宿	M3　堀内　満
短歴紹介	D2　加藤　孔一
黙想	K2　伊藤　信祐
僕のヒストリー	B1　浜本　利彦
五年の大学	D1　高原　喬二
浪人時代	A1　北浜　鎮夫
三枝子の手紙より	M1　伊藤　憲蔵
手紙	川瀬　通世
草帯	K1　竹下　順一
現代風枕草子	E1　吉田　真治
お姉さん	Y1　関谷　五郎
ダイナツの話	C1　千羽　茂雄
人生の明暗	M1　加藤　竜二
入部に当って	Es1　藤田　勝治

戦績

第二回三工大戦　　3 位

第 1 回五工大戦　　優勝

第 2 回五工大戦　　準優勝

東海学生柔道冬期大会(勝抜き戦)　二部で優勝、一部昇格

東海学生柔道夏期大会　D ブロックで 3 勝 1 敗、愛知大学に 2 勝 5 敗で敗れた

愛知大学は中京大学を破り今年も優勝

新入生諸君へ

主将 B3 矢倉 日出男

我々、大学生の本分は学問の探求と人間形成にあると思う。その点で、大学生活における柔道は一つの趣味ではあるが、人間形成の場としては二つとない教育の場であると、小生は信じている。

我々、スポーツをする者は、時として勝敗にこだわりすぎ、スポーツの本質を忘れる事が再々ある。成程、誰にとつても勝負に勝ちたいものである。勝つた時の気持は実にすばらしいものだ。だが、スポーツの真の意義は勝とうと努力する段階にあつて、勝敗それ自体には（意味はあつても）ないと思う。

人間、向上の精神を抱く時、必ず、悩み、苦しむものである。柔道においても然り、強くなろうとすればする程、苦しく、いろいろな悩みが出てくるであろう。その悩み、苦しみを克服した時その人は心身共に、強く、丈夫な人間となるのであると信じる。

新入生諸君も、これから四年間苦しい時、辛い時があると思うが、そんな状態になつた時、「自分は人間的に成長する一つの段階に来た。さあ、努力しなければ」と自分自身に言い聞かせ、その困難にむかつて積極的に解決するよう努力してもらいたいものだ。

それは柔道に限つた事ではない。人間、何をするにも努力が最も大切であると言いたい。

最後に、己に厳しく、他人に寛大なる精神を、柔道を通じて養つてもらいたい。

編集後記

今年の文集は去年の様に、さし絵等が事情で、入れられず、残念でしたが、前よりも、少し立派な物に成つたと思つております。これから、増々立派な文集を作つていける様、後輩にお願します。

又、先輩も文集に、どん〳〵原稿を、お出し下さる様、お願い致します。

堀内記

現役員

主将 B3 失倉日出男
副将 C3 山中鴻志
〃 竹中邦興
主務 C3 千羽茂雄
補佐 M3K2 近藤
渉外 堀内満
愛知柔道連 A3 薬師寺宣安
東海柔連 C3 松井裕

心技

五号

昭和42年11月14日

目次

柔道と私……堀内満 1
柔道の魅力……辻伸彦 2
柔道と人間形成……近藤倖弘 3
あるあかんたれ――劇作作品……室滑文 3
自考……川瀬通世 4
先輩の味……北浜鎮夫 5
新しい自分がほしい……加藤正剛 6
小生と柔道……久野道夫 7
合宿……安藤一義 8
かおるちゃん……加藤竜二 9
道……杉山正明 9
あの人の思い出……フアイター 10
僕のふるさと……野瀬治雄 11
柔道部というところ……上野俊一 12
雑感……吉田真治 14
雑感……片山喜博 15
旅について……安井元一 16
「小説」さいはての女……西村源四郎 18
太陽が又、登る時……那須輝義 19
(一)ペケ子からの手紙……佐能宗治 19
朝……岸田豊 20
試合戦績
第十四回東海学生柔道冬期優勝大会 22
東海地区国立大学戦 22
第三回国立工業大学戦 23
第四回国立工業大学戦 25
昭和四十二年度役員 27
名簿 28
卒業生名簿 29
編集後記 36

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

巻頭言

ー心技五号発行に際してー

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

何と早い事であろうか。我々が役員を引継いでから、もう、一年が過ぎ去ろうとしている。そして今年十二月に、又次期柔道部が生まれようとしている期に、心技五号を発行する事は、編集員としては、誠に嬉しい事である。

この一年を通じて、我々は、如何ように活動して来たのだろうか。昨年の冬期大会についで、五月には、新入生及び昨年度一年生の成長の姿の総決算である新入戦、六月には、東海学生柔道夏期大会　七月には、国立大学としては、最も目標度の高い東海国立大学戦（※初優勝※）　夏には、はるばる北海道まで遠征しての第四回国立五工業大学戦　そして、これから始る東海学生柔道冬期大会と、思えば、試合で一年が終る感がある。しかし我々は、一方では、それを目標に、他方では、強い体力と精神を養うために、練習に励んで来た。この間、五回の合宿等の中で多少ぎこちないところもあったが、割合に楽しい雰囲気の中で過ごせたと思っている。

風香る五月の候、蒸し暑く、息苦しく汗ばむ夏、清爽の秋、こがらしの吹きすさぶ冬と一年を通じての練習と、日々の生活に感じた事、見た事等を思いつくまゝに文章として書き表してみた、それがこの文章であり、一年間の決算とするのは、少々物足りないと思われるかもしれないが、文才のない者としては、精一杯の努力である。一般社会では、新聞、ラジオ、テレビ、映画等のマスコミに支配される大衆。学生に対しては、主体性のない等と言々される中で、自分の考えを文章として表し、主体的な何かを見い出そうとした結果とも言えるかもしれない。

今年は、統廃合（分校が本校に統合）に伴つて、本校の新体育館の側に、新しく新道場が完成した、今までの道場には、四十余年の歴史が秘められている。おそらく、二百名近くの先輩達の汗が浸みこんだ道場である。名残り惜しいが、新しい道場には、又新しい力強い歴史が築かれていく事であろう。

最後に、今までの心技にはなかつた先輩諸氏の名簿を巻末に載せました。かなり前から調査したのですが、昭和十三年から二十七年度卒業生の方々の氏名が不明となつている事は残念というより他ありません。

――編集員――

柔道部と私

機械科四年　畑内　満

三年間を省りみて自分のやつてきた柔道がどのクラブよりも厳しく男らしいものだと、自負してきた。

だが、現実は決つしてそうではなく、他のクラブは、我々よりも、もつと〳〵努力しているのである。

我々が、試合に負けて泣いた事が有つたろうかと考えると、それほど、くやしく思つた事は、今まで経験しなかつたはずである。

柔道で学んだ事に、試合というものは、勝つ事に意義が有るのである。

スポーツの真の意義は勝とうと努力する段階に有るのだろうけれども、それより先の段階には、勝利以外何ものもないと思う。

極端な言い方をすれば、人敵る所敵である。友も又、ある時点に於いては敵である。

たとえ練習の時でも自分とする相手は敵なのである。

投げられた時は、腹を立て、投げる手段を考えて欲しい。

まず、クラブ内で敵を、自分よりも一歩さきの敵を見つけるのである。三歩も先の敵は無視する事があつても、一歩先の敵はなるだけ早く近ずき、追い越すのです。

その為には、決つして練習はサボれないと思うし、練習の時にも笑つたりフザケてはいられないと思う。

試合に負けて笑つて戻つてこれないでしよう。

語幣が有ると思いますが、クラブ、柔道部が、人間形成の場として役立つのは、その苦しさ、厳しさに立つて初めて役立つものと、私は思つています。

参考までに私の四年間の柔道苦しみ歴を書きますと、

〔一年七月〕、合宿の飯たきを毎日〳〵やらされ練習を、やらしてもらえないし遊ぶ時間がない等で、やめたろうか・・・と考える。

〔二年四月〕いくら頑張つても自分の技が出来ず、強くならないので頭にきて、やめようかと考える。

〔二年十月〕練習に出るのが、つらくて、又、強くならないし、他の事もやりたくて、やめたろうかなと少し思う。

三年の時はクラブを運営していく責任感だけで考えている余裕なし。

〔四年〕四年生が誰も練習に来ず、又責任感から開放された喜びと遊びへの魅力が、フラフラさせている。

最後に、寒い日も、暑い日、疲れた日も、三年間、いや四年間には、幾日か、あるでしようが、頑張つて、毎日欠かさず練習に励んで下さい。

（完）

柔道の魅力

B3 辻　伸彦

僕が柔道をやり始めたのは、中学一年の十月の終りに近い、服を脱ぐには寒い日であつた。それ以来、マジメ人間の僕は、雨の日も、風の日も、雪の日も、毎日練習に参加して、丁度八年目にかゝろうとしている。今つくづく、八年間をふり省つてみると、背は高い方だつたが、肯しか見あたらなかつた様な体で、毎日厳しい練習に良く耐えられたと思う。

これまでは、耐え続けられた理由を考えて見なかつたが、又機会がなかつたが、今原稿を書くのに、思い直してみると、次の様な魅力あるのではなかろうか。

人間は、類人猿からかどうかは知らないが、誰れでも美にあこがれるものである。

古代ギリシヤから、男性美というのは、彫刻等に見られる様に、外観的には、筋力が盛り上つた、たくましい身体である。男性の女性化が問題になつている現代でも、真の男性の美の価値観は変つていない。そんな美を求めるために、苦しい練習に耐え得る一つであろう。

又、スポーツをやつている者は、誰れでも感ずる、あの練習後の爽快な気分、真夏の練習で全ての汗を流した後の氷のうまさ、真冬の練習後のポカポカした気分、これこそ四季を通じの柔道のダイゴ味であろう。

「健全な身体には、健全な精神が宿る」と言われる様に精神面のプラスも、目に見えないが、柔道をやつた人と他の人とには何か差異があるのがわかる。

柔道は個人対個人の体をぶつけ合うスポーツである。相手を倒すには、相手の出方を、体全体で読みとり、それに対しては、全力を集中して、自己の能力を最大限に出さねばならない。全神経の集中には、先ず已に克たねばならない。自己に克つ精神力を作るには絶えまない、厳しい練習によつて得られるものである。

これらの事が融合し合つて柔道の魅力を作り上げていると思われる。一度この魅力に取り憑かれたものは、やめられない理由であろう、試験あるいは傷などで練習が出来ない時には、練習がしたくて、体がムズムズしてくるのを感じるだろう。

以上僕の八年間の中で感じた柔道の魅力についてつれづれに書いたが、人それぞれに、希望、目的をもつていると思われるが、その目的に向かつて学生生活最後の四年間を有意義に、悔恨のない時期である様に、共に苦しみ、はげましあおうではないか。

小生と柔道

商業学科一年　久野道夫

小生、柔道を始めて、三年、未だレッキとした無段者であり、連日実力通り先輩並びに同輩に畳にたたきつけられている。それにもかかわらず毎日？サボらず？真面目に？練習を続けていられる時何故だろう。？

世の中が極度に文明化されると、人々は素朴さ、原始というものにアコガレを抱くようになる。人間が完全無欠な経済人であれば、不合理、不便な事を望むはずはなく、より高度な文明を欲し、追及するはずである。ところが、それとは逆に原始を夢見るというのは、人間に感情があるからであろう。例えば、夏休みにキャンプ生活をしたり、トップレスの水着が流行したり等々……。

このように考えてみると、柔道というスポーツも、他のスポーツにおける複雑なルール化多種の器具の使用に反撥したものという事ができると思う。柔道、それは各種のスポーツの中で最つとも原始的な、素朴なものの一つである。二人の人間が勝敗を決めるのに、素手で投げ押え利するというのは、原始そのものである。小生が柔道に魅力を感じるのも、このような点にあるのだろう。言い換えれば、小生は高度の文明人であり、柔道こそ現代を代表するスポーツということになるが……。

小生は尺八部にも又属しているが、尺八も楽器の中で、原始的なものであろう。特に小生は素朴を愛する気持ちが強いのか、音のうちでも特に原始的な音、すなわちシューシューという音を発し、道場でも柔道部の方々の耳を楽しませている。素朴さにあこがれる柔道部員には、何ともいえぬ音色だと、心密かに確心している。

このように書いてくると、ただひとつの疑問が残る。それは、小生は原始的な顔をし、野人的態度性格を自認しているのであるが、世の女性達は何故か小生に寄り付かない。これは非常に重大な問題なので必死に原因を捜してみたところ、ひとつの決定的な結論に到達した。それは、世の女性は文明化が遅れている、ということである。そしてこの結果により、小生の顔も数年後には必ずはやるという明るい希望を持つことができた。

先日も、数年後女性にまつわりつかれる小生の姿を想像しながら乱取をしていたら、アッというまに、足が畳から離れ、体がフワリと宙に浮き、天井がグルーッとまわってドシーン。

第十四回東海学生柔道冬期優勝大会

十二月十一日、於　スポーツ会館

勝抜戦（予戦リーグ）

対名城大　一人残し名城大の勝

対愛知学院三人残し愛学院大の勝

その結果昨年の優勝校は中京大、準優勝愛知学院大、第三位岐阜大でした。尚名工大は、第一部最下位決定戦の対南山大学戦、五人残し名工大で一部に安泰することができました。

第十四回東海学生柔道夏期優勝大会

夏期大会はＡＢＣＤブロックに分かれ、名工大はＣブロックで戦いました。

名工大――中京大（〇勝六敗）

名工大――愛工大（三勝二敗）

決勝リーグ戦において、中京大は愛大を破り今年は中京大が優勝しました。

東海地区国立大学戦

七月九日、於　静岡草薙体育館

三重大学　　名工大

先　山本　合せ技　〇浜本

次　竹中　　吉田

三　鳥潟〇　背負投げ　水野

四　窪田〇　内股　近藤

五　井口　横四方固　〇辻

六　小椋　大外刈　㊀室

七　近藤　　高原

八　南出　内股　㊀堀内

副　酒井　払腰　〇守谷

大　加藤　内股　〇樋田

名工大　　岐阜大

先　辻　〇縦四方固　堀内

次　吉田〇　支つり込足　末田

三　那須　小内刈　㊀石子

四　近藤　　森

五　浜本〇　はね巻込み　吉井

六　守谷　払腰　〇狩野

七　高原　　島田

八　堀内　横四方固　〇杉江

副　室　㊀大外刈り　富田

大　樋田　背負投げ　㊀広瀬

名工大（決勝戦）　　名大

先　吉田　　土田

次　浜本〇　合せ技　高橋

三　辻　〇谷落し　矢吹

四　近藤〇　背負投げ　佐藤

五　室　　池田

六　高原　横捨身技　〇杉浦

七　樋田　　竹田

八　堀内　　須崎

副　那須㊀　反則注意　二村

大　守谷〇　払腰　近藤

対三重大学　六勝二敗二引分け

対岐阜大学　四勝四敗二引分け

対名古屋大学五勝一敗四引分け

尚岐阜大には内容勝でした。

優勝　名工大

準優勝　名大

試合形式は三重大、岐阜大、名工大をＡブロック、静大、愛教大、名大をＢブロックとして、各ブロックのリーグ戦によりました。これは先にお知らせした通りです。

第三回工大戦　団体戦

名工大　　東農工大

先　吉田　合せ技　〇黒須

次　辻　内股　和田

三　高原　内股　〇伊賀

四　堀内〇　内股　加藤

五　矢倉〇　背負投げ　牛山

六　浜本〇　内股　時田

七　山中　　小野

八　守谷㊀　送足払　大野

副　竹中　背負投げ　㊀内田

大　樋田〇　けさ固め　坂上

名工大　　九工大

先　浜本〇　肩車　角間

次　吉田　　広川

三　高原　上四方固　〇山本

四　矢倉〇　大外刈り　林田

五　守谷〇　返し技　高山

六　辻　　沖田

七　竹中　　堤

八　山中　　荒本

副　樋田　　本田

大　堀内　　山口

名工大　　東工大

先　浜本　　内田

次　吉田　　今泉

三　高原　　鈴木

四　竹中　　板東

五　辻　〇払腰　藤堂

六　矢倉○大外刈り　加藤
七　山中　塚本
八　守谷○体落し　矢沢
副　堀内　○柿谷
大　樋田　原田

名工大　京工大

先　浜本○払巻込み　尾銭
次　辻　○大外返し　沖野
三　矢倉○返し技　土坂
四　室　合せ技○伊藤
五　樋田○はね腰　守本
六　守谷○けさ固め　田中
七　高原○小外刈り　宗宮
八　竹中○送り足払　手塚
副　山中　沖本
大　堀内○内股　中村

名工大　室工大

先　浜本○大外落し　岡崎
次　吉田　反技　⊖鈴木
三　高原○内股　伊勢（達）
四　竹中　木村
五　矢倉○内股　伊勢（敬）
六　辻　払腰○加藤
七　山中　長嶋
八　守谷　渡辺
副　樋田　高橋
大　堀内　五十嵐

対東農工大　六勝三敗一分け
対室工大　三勝二敗五分け
対九工大　三勝一敗六分け
対京工大　八勝一敗一分け
以上より五勝○敗にて名工大優勝

第四回国立工業大学戦
七月三十日、於　室蘭工大体育館

名工大　九州工大

先　近藤　角間
次　水野　大外刈○山本
三　吉田　けさ固○内田
四　西村　角田
五　樋田○払腰　佐藤
六　浜本　大竹
七　那須　山下
八　室　広川
副　辻　⊖内股　末永
大　守谷　仲田

名工大　東工大

先　近藤　内股○鈴本
次　佐能　塚本
三　吉田　背負　⊖藤堂
四　浜本○手内股　板東
五　西村　大外返し○奥山
六　樋田○大外刈り　内田
七　那須　内股　⊖佐藤
八　室　○大外倒し　金子

副　辻　○内股　今泉
大　守谷○体落し　原田

名工大　室工大

先　浜本　土坂
次　近藤　背負投○鈴木
三　樋田　木村
四　西村　柴田
五　佐野　けさ固○加藤
六　室　背負投　⊖長嶋
七　辻　中村
八　那須　渡辺
副　守谷○内股　伊勢
大　吉田　五十嵐

名工大　京工大

先　佐能○不戦勝　嶋津
次　吉田○内股　藤木
三　浜本○後腰　尾銭
四　近藤○合せ技　井上
五　樋田○上四方固　伊藤
六　室　○小外刈　沖野
七　辻　○合せ技　沖本
八　守谷○合せ技　川上

副　西　村○　不　戦　勝
大　那　須○　〃

以上より、名工大は、室工大及び九工大（内容敗け）に敗れたため第三位となりました。今年は東京農工大が出場しなかったために五工大によるリーグ戦でした。

優　勝　室蘭工業大学
準優勝　九洲工業大学
才三位　名古屋工業大学

個人戦においては名工大浜本参段は優勝戦で室工大加藤参段に惜敗し才二位となつた。（次頁の個人戦績を参照して下さい。）

個　人　戦

優　勝　加藤（室工大）
準優勝　浜本（名工大）
才三位　本村（室工大）
　　小池（室工大）

昭和四十二年度役員

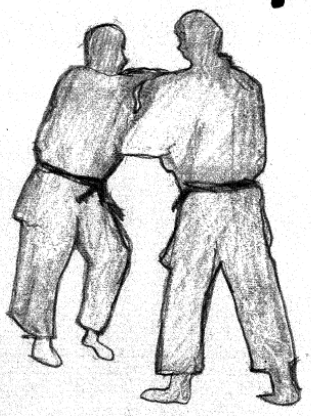
主　　将　B_3　辻　伸彦
副　主　将　K_3　守谷　稔
〃　　K_3　近藤　倖弘
主　　務　K_3　伊東　信祐
道場監督　K_3　水野　宗男
愛柔連会計　K_3　安井　元一
東海柔連理事　M_3　青山　義光
会　　計　E_3　上野　俊一

編集後記

今年の十月に千種分校が本校に統合し、又工大全体としても学部増設等、又新しい六・七階建の教養校舎、大講義室と大きく変貌しようとしています。それに伴つて旧道場はなくなり、新たに本校の体育館の側に百二十畳の道場できました。柔道部員も五十名近くになり、ます〳〵意欲的に練習に励んでいる次才です。名工大という工科系単科大学に属し、その又柔道部という、およそ文学には関係のない部分に属している関係上どうしても、原稿が集りにくく、ついに今頃になつてしまいました。我々が日頃何を考えているのかを解していただけば幸いと思います。そして先輩方がどし〳〵寄稿下つて、もつと〳〵充実したものとなる事を願つて止みません。巻末に先輩の住所を載せておきましたが、誤り、又不明な箇所の住所を御存知の方は是非柔道部宛お知らせ下さるようお願い申し上げます。

K_3　伊東信祐

心技



昭和43年6月

六号

目次

四十三年度東海学生柔道行事予定
別れのことば（追い出しコンパより）
―四十二年度卒業生

四年生との対話……3
生きる……浜本利彦……3
道……高原喬二……4
無題……西村源四郎……6
ある計画・同感に感ず……北浜鎮夫……7
北の夜空・随筆……加藤正剛……8
酒……安藤一義……10
旅……岸田豊……11
随想―男鹿……久野道夫……12
Tの思い出……鍔部重久……12
心静かに思う事……河村孝一……13
短歌……古橋公二……13
「原爆詩集」……星野幸吉……14
夢想……平野悟……15
理想郷……池田治朗……16
硝子戸の中……久野広明……17
夕焼け……西本昭二……18
柔道と僕……今飯田哲……18
〃特集〃―先輩便り・近況……19

昭和六年卒……西田金三朗……19
神戸七郎……19
昭和八年卒……渡辺勇……20
昭和九年卒……森川喜八朗……20
昭和三十五年卒……松本勝史……20
昭和三十八年卒……木村隆……21
宮口守弘……21
昭和三十九年卒……伊藤愈……21
昭和四十年卒……木村衛……22
昭和四十一年卒……杉山倫一朗……22
海老沢秋生……23
原田彪……23
昭和四十二年卒……三村雅彦……24
竹中邦興……24
補久保昌大……24
試合戦績……堀内満……25
第十五回東海学生柔道夏季優勝大会……25
昭和四十三年度役員……27
名簿……28
卒業後記
編集後記……38

表紙カット　北浜鎮夫

巻頭言

―心技六号発行に際して―

本年は明治百年であり、マスコミでも、いろ記念記事が様々な行事が行なわれている。

我が名工大の歴史も、明治三十八年、三月二十八日名古屋高等工業学校として創立して以来、六十年余りの歳月が流れた。

日本の伝統的武道である柔道、その道を求めている我が名工大柔道部は、ほゞ母校の名工大と共に歴史を同じくしてきた。

この由諸ある柔道部に我々が属していることを、幸いと思うのです。そして、先輩諸兄の近況だよりを、私達の文集に連載することは非常に意義のあることだと思います。

我が名工大柔道部の発展を期する為に、この文集がその一助となれば幸いと思いますが、その巻頭にあたつて柔道の発端について述べてみることが適切であると思います。

徒手格闘に関して、最初に出た文献は、元明天皇和銅5年（七一二年）の古事記に述べられている出雲国ゆずりにおけるタケミカツチノカミとタケミナカタノカミの力比べの話しである。これは出雲を中心とする両族の勢力争いを、その代表者の力くらべをかりて表現したもの。この勝負はタケミカツチノカミが投げとばして勝つたという。

古い時代の格闘技は、力比べ、一角力と呼ばれ、逆手、投げ、けり、四ツ身を使い、これが組打ち、柔術に変つた。各流派は竹内流など数十をかぞえた。

明治維新と共に柔道家は整骨業に転職し、その後、嘉納治五郎が創始した柔道の台頭をみる。段位は明治十六年に設け、今日の投、固、柔、極、五ツの形などの基本が同二十年ごろまでに制定された。

最初の講道館は明治十五年、東京、台東区の永昌寺内に設け、数か所を転々、昭和三十三年現在の文京区に落成した。

国際柔連は昭和二十六年設立、同三十年には、第一回世界選挙権が東京で開かれ、東京五輪では初の種目に加えられた。

以上簡単ではありますが、柔道の歴史について述べてみました。

この歴史上、屈指の柔道家、嘉納治五郎先生の遺言は、我々、柔道を学ぶものにとつて、最大の訓戒だと思われます。

「柔道は、心身の力を最も有効に使う為の道である。絶えまない練磨を通して攻撃と防御を習得することによつて、人は心身の修養を積み、そして自分自身の中にその精神を具現する。これによつて、人はその人格を高め、世界に貢献する。これが柔道を志す者の究極の目標である。

昭和四十三年度東海学柔道行事予定

○五月十八日　県スポーツ会館
第十五回東海学生柔道夏季優勝大会
○五月十九日　県スポーツ会館
第六回東海学生柔道体重別選挙権大会
○六月二十三日　於　大阪
東海対大阪学柔連対抗試合（各校より一―二名）
○七月七日　於　講道館
全国、国立大学柔道優勝大会
○七月十四日　県スポーツ会館
東海地区国立大学戦（愛教大主管）
○十一月十日　於　金沢
五地区対抗試合（各校一―二名出場）
○十一月十七日　（未定）（名城大主管）
第二回東海地区工業大学柔道優勝大会
○十一月二十三日　於京都工繊大
第五回国立大学六工大戦
○十二月八日　於県スポーツ会館
第十六回東海学生柔道冬季優勝大会

柔道部あれこれ

一年の計画表で述べたように、我が柔道部は、試合の連続で緊張の毎日のようだが、なかなかどうして、家族的　団気の漂う楽しき哉柔道部である。

一年の始め月の寒げい古、縦のつながりをより認識する数々のコンパ、東海女子大との合ハイ、夏には東北遠征の合宿、空手部とのソフトボールの親善試合、部員全員で、月並の時には応援したこと。……

以下柔道部の予定表を記しておきますから、先輩諸兄の御参加を期待しております。

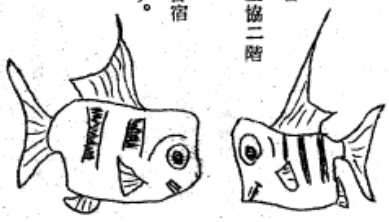
昭和四十三年

六月十七日　二十九日　強化練習

七月一日　十三日　合宿、生協二階

八月十七日　二十四日　秋田にて合宿

秋の予定は決定しだいお知らせ致します。



別れのことば

追い出しコンパより―於　初寿司

○体力と精神力を養成すること。柔道を通じて大学生活をエンジョイできたが、諸君は、勉強にも柔道と共に励んで下さい。

矢　倉　日出夫

○七年間続けた柔道にて精神力、体力を養えて、社会に出ても恐いものはありません。柔道は練習以外に何ものもありませんが、自己に強くなって下さい。

竹　中　邦　興

○身体を接する柔道にて人間らしいつき合いが出来たと思う。消極的だった性格も、積極的になり、生きがいというものを見つけました。柔道を通して、自己をみがいて下さい。

千　葉　義　雄

○連盟の仕事を主にしました。「自分に自信を持て」「自分には限度があることを知れ　」を戒めて頂きたい。

松　井　　裕

○寝技を特に練習する様に、小さい者が大きい者をねじふせる。動けない、何如か、その中心になる点を見出だして下さい。つまり柔道に開眼を期待します。

浦久保　昇　太

○練習には遅刻しないこと　これは最も簡単で最もむずかしいが。練習を休まぬこと　相手にのまれるな　即ち柔道に敗けても、気構えは敗けるな

堀　内　　癌

○試合の良し悪しは選手以外の応援にて決定する。試合の前の心がけは、　達でやるのだという意識を持て。旧道場の部員の良さ　野性美（オンボロにこめられた）を亡くすな　新道場という温室育ちにはなるな。

山　中　鷹　志

○根性を持って、毎日欠かさず練習をする様に、自己を練磨する様に、柔道部という誇りを持て。

薬師寺　宜　安

四年生との対話

――、今の四年生は、確かに良く頑張つたと思う。初の国立大戦の優勝等、文字通り名工大柔道部に歴史の跡をとどめられたわけである。これは幹部となつてからの即ち、三年生の時の、変化というか、闘志に燃ちた根性の結果だと思う。

変化　確かに、変つたと思われる。勿論、最上級生として当然かも知れないが、我々は、見習うべき点があろうと思われる。そこで彼等との対話をインタビューして記録した。

どうですか、学生時代をふり返つて。

そうだね、名工大は全学的交流が少ないね。その意味でも柔道部を通して、他の科との接触が得られたことはよかつたね。

柔道部に入られてどうですか。

友を得たことだね。練習、合宿等を共に行動して得たものは、離しがたいね。

自己の可能性を追究できたこととか。

男が「夢中になるもの」「打ちこめるもの」を体得否、経験したことは、非常にプラスであつたよ。

今の柔道部員に何を求めますか。

そう。規律だね。部を通して縦のつながりの有り方、礼儀をわきまえないで、どうして社会の中でうまく行くはずがあろうか。勿論固苦しさではなく、挨拶程度を言つているのだが。それと柔道場に出入りする時の敬礼も忘れているものが多いが。

柔道以外の趣味は。

ダンスが好きだね。

女の子と、共にドライブすることだよ。

絵を書くこともいいね。高校時代美術部だつたよ。

読書だぜ。サルトルは仲々生かすねえ。

（但し麻雀、パチンコ、酒、煙草は趣味に入れず）

B3　浜本利彦

私が今日まで二十年余り生きてきて、その半分近くの九年間、柔道をやつてきました。その間に何を感じ、何を得て、そして現在柔道について、というより運動部について、どんな風に考えているのか、書いてみたいと思います。中学、高校、大学生活を通じて、柔道部生活、プラス学問生活で、最初に柔道部がくる生活でしたし今もそうです。何故クラブ中心の生活で今まで過ごしてきたか。そう自分自身に問を発する時、その答は決つています。私にとつて、クラブの生活が他の生活より　力があり、好きだか

らです。何故　力があるか。ここに二三の事柄を書き並べてみましょう。ここからある解答が得られるでしょう。たとえ二三ケ月会わなくても、会えば、二三ケ月のブランクなんて、全くと言っていい程感じません。もうまるでずっと一諸に居た様に感じません。これは大学を出て、二三年に、いや四五年に一度位しか会えなくなるかもしれません。でもこの状態は変らないでしょう。又練習を本当に一生懸命やっている時、何もかも忘れられるということです。少々すりむいても、身体を打っても、全く気がつかず後で気が付く様な時、動と静の違いはありますが、座禅でいう無我の境地と相通ずるものがあると思うのですが。又汗をいやという程流した後の、一杯の水のうまさ、一吹きの風の気持良さ、など、もう分かっていただけると思います。

私は大学が入って二つの事をしようと思いました。一つは心からの友人を作る事、もう一つは自分自身を巾広い人間にする事、例えば、数学では一十一は二ですが、人間の場合、一十一は0でもあり、一でもあり二でもあり、又十にもなる事を知り、死を、生きる事を考え見つめる。これが二つの目的でした。そしてその為に柔道部に入ってよかった、そう思っています。

この文集を貸りて私を含めた皆に要望があります。一つは、このクラブは私達皆のクラブであるという事、つまり、あなた自身私自身が作り上げていくクラブであり、誰の為でもなく、貴方自身の、私自身のクラブであるという事を、いつも思っていて下さい。

もう一つ練習する時は、一生懸命にやって下さい。そうでなければ、柔道の本当の良さは分かりません。

そして最後に、これは柔道だけでなく、すべての面に通ずる事で、大変むずかしい事ですが、「自分自身に厳しく、他人には寛容であれ。」この三つを要望します。

「道」

工化三年　高原

小川の細々が、遠くなったり近くなったりする山道を春とはいいものだと思いながら歩いていた。岡崎公園の桜はもう満開だというのに、こと中仙道にはやっと春が来た。紅梅白梅が咲きそろい鶯が春だ春だと歌っている。

ふと彼方より調子はずれの大声を張りあげてやってくるものがある。それが歌であるとわかったのは丁度顔と顔が出合った時だ。

「今日は」

「やあ　今日は」

これだけの会話が交されただけでも親しみがわいてくるというものである。

無精　をはやした山男は訳もわからん歌を口に、だんだん小さくなった。その時「人間とは不思議なものだなあ、」と独り言を言

つた。山本君が、「うん、不思議だ。」と言つたなり口を閉いでしまつた。二人は再び静かであつた。やつぱり聞えるのは細々の音と遠くからの鶯の歌ばかりであつた。

文学に全く興味の薄い二人がここにやつて来たのは、ただ「俗化していない」という言葉に引きつけられただけである。無論藤村とは非常なる読書家であつたということだけ記憶している。出る時、その館の管理人らしき老人が、「二階の襖に書いてある字は如何読むかわかりますか。」と知能試験をするので、何に人の書いたの位読めんでなるものかと二階なるところに上がつた。南に面した八畳じきの室には二枚の襖に二字ずつ大きな字があつた。二字は何とかわかるが後がわからん、くそと思つてその前に正座してじつとながめてみたがますますわからん。馬鹿馬鹿しくなつて下へ降りて老人に降参してたずねたら「礼泉成雨」と言つたなり何も言わんかつた。きつとこの学生はできの良い方ではなかろうと思つたのだろう。

それから、朝の新鮮な空気を吸いながら数時間山道を歩いた訳である。

突然山本君が

「信濃路は今の墾道刈り株に足踏ましなむ履はけわがせ……

うん……わかるわかる……信濃路は……か。」

「おい、いつからそんな文学者になつたんだ。」と言うと

「何に、実はさ、さつき君が用をたしている時案内板にそう書いてあるのを見たんだ。」

「なる程、それ位だろうとは思つていたんだがね。」

二人の前方に白い雪を頭の上にちよこんとかぶつた木曽駒が空の青にくつきり見える。

木曽路は全て山の中であるさながら大木が二人を暗くした。樹齢数百年の老木は昔ここを旅した人々の旅愁を一コマ一コマ思い出しているかのごとく感ぜられる。

山本君が、「おい滝だ滝だ。」とさけんだ。ゴーという水の落ちる下手の方に目を移すとウツウとした木々の間に一筋の滝が見えた。数十間の深さの河原に下りるのは仲々骨が折れる。さ程大きいのではないが……そのとなりにもなかよくもう一つ滝がある。それを称して男滝女滝と言うそうである。うまいこと命名したものだ。だがあの威厳ばかり誇る華厳の滝よりこの二つの滝の方がどれだけ親みやすいやら……

この滝の下でしばし休息して又歩き出した。歩き出すということは実にスマートなペースであるということを多分に含んでおる。しかし中仙道がこれ程石ころばかりの山道なぞと思もよらない二人の足は一張羅の皮靴の中で悪戦苦闘を続けている。そんな訳で常よりも歩き方の良い二人の姿は他人が見れば滑稽極わまりないものであつただろう。

「僕は自分がわからなくなつた。まるで池の中のヤゴみたいに

どうかして大空に大手をふつて飛んでみたいと思つて水面から顔をひよつこり出すと何か強烈な力で水底深く沈められてしまう。これじやいけないと又、上がる。すると又、沈められる。ヤゴは理想ばかりを思い、夢ばかりを見る。以前はこれだけでもよかつたんだ。でも今は違う。甘い夢の中から脱皮しなくてはと思うようになつた。しかし……」

「しかし君は、そういうことを考えるだけでも偉い。僕なんざ、夢にさえ見たこともない。考えるとせつかくの楽しい人生も不愉快極わまりないものとなつちまうさ。ともかく自然のままに生きるのが一番いい。」と山本君は皮肉にもそう言い切つた。

「僕は君のように気楽な身分になりたいものだ。」

「だが、こういう悟りの境地には仲々なれないものだぜ。特に君　君なんざあ。」

「もういいよ、ｑｏｉｎｇ　ｍｙ　ｗａｙ　で行くから。」

太陽は二人の頭の上から春の日を散々とふりそそぐ。

道はまだまだ続く

二人はかたをならべて独特な歩調で歩き続ける……

無題（だいなし）

D5　西村　源四郎

此の間、「夜の大捜査線」という映画を見た。

（荒筋）

或る南部の小都市に殺人事件が起こる。駅で汽車を待つていた黒人が容疑者として取り調べられる。彼は実は北部の殺人事件専門の刑事で、白人の偏見に耐えながら、事件を解決していく。

映画としては単純なものだが、その裏にはアメリカの汚点である人種差別問題、特に黒人問題が隠されている。

それは彼が、ただ単に、黒人であるというだけで殺人事件の容疑者に、でっち上げられたり、又、捜査を防害されたりするくだりにある。

これは、アメリカだけの問題ではない。日本にも、それに似た様なものがある。

部落民差別、朝鮮人差別などがそれである。関東大震災の時、朝鮮人が大暴動をおこしているというデマのために、日本人が朝鮮人を逆殺したという話を知つている人もいるだろう。又、部落民というのは、日本人の記録から薄れつつはあるが、就職の時、又は、結婚の聞きあわせなどの時、必ずと言つていいぐらい発覚

してくる。

人の才能や、成した仕事には、敬意を払うべきである。人種、の色などは、どうでも良いものである。個人を見るべきである。しかし、人間は偏見のみで人を差別してしまう時がある。偏見が人を苛したり、自殺に導くことがある。

人の偏見がなくなり、人が互いに尊重し合えるような世の中が、はやく来ないだろうか。

ある計画

A3　北浜鎮夫

中南米諸国の人々との親善

諸都市の大学生との交歓

南米移住者との接触

ブラジリア、メキシコシティ等に於る都市構想とその現実を多角的に考察する。

以上を目的とする自動車旅行を企画して、早一年半、メンバーは柔道部員、浜本、北浜、と他に美術部の仲間二人。

日帰い労働、家庭教師、学習塾、店員同様の下宿生活にて、資金、各人二十万近い。

目下、自動車を貸与或いは提供してもらおうと企業体に当つています。がしかし何しろすでに幾度か試みられた企画であるだけに、スポンサーが見つからず四苦八苦しています。名工大OBを通じ会社に当つた所、会社側にとつて宣伝効果のみならず、何か企業側にとつてプラスとなる様な、特殊性を持つか、文部省などにあたれば何とかなろうということです。

同輩に感ず

友よ、さびしい時、おまえに会いたい。

友よ、悲しい時、おまえに会いたい。

おれは友ができるとは思わぬ。友を作るのだと思う。見方による違いだけであるが、幼き頃、あこがれていた、道着姿で柔道をすることを、この柔道部を通して数々の友ができたことを、記憶に滞むべく、ここに記したい。

口は悪いが、善良であり野心家である。愛すべきあいつ。友の引越を頼まれれば、断れないあいつ。友の悩みを聞いて涙を流すあいつ。滞停をしらず、いつも歩み続けるあいつ。

何かを求めようとし、人生に深い疑問をいだいているあいつ。

体はでっかいが、気はやさしい、威圧感を与える堂々ぶりがおもしろいあいつ。

田舎くさい風貌だが、素朴な根性が魅力のあいつ。

何かをいつも求めているあいつ。純化しやすくて、常に他に左右されているようだが、頑張る根性がある。

四国の産で、いつも、ユーモアを持つが、何か幼ない感じのあいつ。

ギターを共に習つたあいつら。典型的真面目学生らしいふうな奴。

いつも会想はよくて、世話好きなあいつ。

Tの思い出

ES1　鍔部重久

中学一年から今年で足かけ七年になる。もういいかげんイヤになるころなのだが、慣れというものはおそろしいもので今だこりもせず続けている。（これは柔道のこと）

小学校の頃から自分でもこれはいいと思ったことは一つもした覚えがない。女の子をけつとばして職員室に呼び出されたり、教室の窓から飛びだして下のどぶに足をつっこんだり、中学校時代にはいるともつとひどくなる。板壁に釘を投げつけてナイフ投げの練習をした時担任の先生に運悪く見つかつて、手の甲に釘をおしつけられた。この野郎と思つたが相手が先生では何ともならない。こんな時は所かまわずあたりちらしたが、そんな時に僕の心を静めてくれたのはTであつた。Tの性は読者の判断にまかせるが、とにかく今まで少年院へも行かずにすんだのはそのTのおかげであつたかも知れない。

先輩便り＝〝特集〟ー近況ー

昭和六年卒

西田　金三郎

前略御便りなつかしく拝見致しました。学窓を出て既に三七年の星霜は夢の如く流れ去り過し昔を偲び只々感慨無量です。

過去を振返つて見ますと朝鮮に於ける（慶尚北道大邱府）役人生活、現職のまゝ昭和十六年十一月朝鮮に於いて召集を受け、陸軍の兵隊としてビルマに転進従軍すること約四年七ケ月、ビルマにありて終戦を仰え昭和二十一年七月半ば内地に復員、生れ故郷である名古屋に一歩を印した時は殆んど見渡す限り焼野原で只茫然として涙にくれたものでした。

其後農林省の出先機関に奉職し、国家公務員として約二十年を過し去る昭和四十一年一月役人生活に終止符を打ち現在（株）熊谷組の名古屋支店に於ける工事現場表記の所に宿泊し、老躯に鞭打ち……健康で暮して居ります乍他事御安心下さい。愚息三男（終戦後生れ）が現在東京の都内の大学三年生で在学中ですから諸賢と同年輩位と思われますが、どうか頑丈な肉体の形成と逞しい精神力の養生に御努力を傾注せられ、柔道部諸賢の御発展と躍進を祈りつつ。乱筆多謝

（土木科卒）

神戸　七蔵

部員の皆様には新学期、新部員も加わり、真新しい希望に燃え増々、勉学試合に御精励の由心から祝福します。小生も今年は還暦。

五月五日に五人の子等と五人の孫に囲まれて、子供の日に併せて還暦の祝福を受けました。一番末子が小林寺拳法とかを一生懸命にやつて居りますが、若い者は元気でほんとに良いなあとつくづく思われます。

小生もお蔭様で、若く鍛えた柔道の賜か、六十才になつた今日病気一つなく、とても元気でやつて居ます。どうぞ勉学も練習もあなた自身の為めです。若い中に暇のある中、最大の努力をして下さい。末筆乍ら、再々の御便りを感謝します。

（建築科卒）

昭和八年　建築科卒

渡辺　勇

拝啓、再三の御連絡並びに、毎回の「心技」御届け載き誠に有難く拝見致して居ります。元気の良い青春の息吹きを感じ何時も若返った気分になります。

この度名古屋支店建築部長として赴任して参りましたので、皆様と御拝眉の機会もあることと存じます。諸君の御健斗を祈り御厚情に対する御挨拶と致します。

（建築科卒）

昭和九年卒

森川　喜八郎

東京、日本橋の帝国繊維KK本社勤務（総務、勤労、経理、管理、企画）

役職、取締役管理本部長

ずい分各地を転任して歩いたが、目下、五六年、東京におちついています。）

昭和九年に卒業したが、部の仕事はマネージーをしていた。

昭和八年夏の東京で行われた全国高の柔道大会はマネージーでも選手として登場、優勝した思い出が残っている。

（工業化学科卒）

昭和三十五年卒

松本　勝史

拝復、名工大部誌「心技」楽しく読ませて頂いております。学生時代のあのころを思い出して楽しいものです。

近況

(1) 大阪セメント㈱大阪工場製造課にて元気に働いております。

(2) 美人の奥様と二人の生活中で学生時代のあの邪えた技が見られず、新婚一年三ケ月で子供なし。

(3) 柔道は現在やっておりません。

(4) 学生時代どうしても七二　以上になれませんでしたが、現在少々肉が余り七九　位になって困っております。

（窯業科卒）

昭和三十八年卒

木村　隆

拝啓御無さた致しております。部員諸君の活動、柔道部隆盛、ますます盛んなる事、心からお喜び申し上げます。ところで、吉村さん、お元気ですか。もう二世が、元気にはしやいでいるのではないですか。私はまだ、相手もいませんので、ラグビー等やつて運動不足をカバーしております。〃金ちやん〃どうしてますか。望月、貴様は相変わらず飲みつぶれているのではないか。実をいうと、小生去年、会社の　で、飲みすぎ二階の階段から落ち、足の骨を折つて会社のもの笑いになつて、余り飲めなくなつた。

では部員諸君の御健闘を祈つて失礼します。

（機械科卒）

昭和三十七年卒

宮口守弘

拝啓、柔道部の皆さんガンバツていますか。「心技」等のお便り、楽しみに拝読させてもらつています。さて最近の近況を知らせとのことですが、大体左の様です。

勤務先、東洋ゴム工業株式会社化成品製造部生産技術第二課（厚木工場）

（厚木市金日九八二番地）電話〇四六二（厚木二二一四〇一一一八）

仕事はウレタンフオーム（マツトレス等のクツション材）関係です。

柔道は入社後三年程やりました、現在は、やつていません。

目下余暇には、ドライブ、釣、ゴルフ等です。ボツボツ嫁さんを探そうと思つている所です。

（工業化学科卒）

昭和三十九年卒

伊藤　愈

拝啓、陽春の砌益々御清適の程御慶び申し上げます。さて私事この度、興和ＫＫ物資部機械課に転勤を命ぜられ、この程着任致しました。古知野工場在勤中は公私に　り、格別の御懇情を賜り有難く厚く御礼申し上げます。

尚今後共何卒宜敷く御指導御鞭達の程、偏へに御願い申し上げます。

先は右略儀乍ら書中を以て御礼並びに御挨拶申し上げます。

巻末に収載　（繊維科卒）　散具

昭和四十年卒

木村　衛

前略、春暖の候、皆様は御壮健の故大賀に存じます。
左記に転居致しております。先ず御連絡迄。

神戸市東灘区本庄町　札場通り二ノ二一一
深江竹友寮内　　木村　衛
（建築科卒）

昭和四十一年卒

杉山　倫一郎

先日スポーツ会館にて久し振りに後輩諸君の試合を見せてもらつた。一口に言つてよくやつてくれたと思うが、何か物足ないものを感じないではなかつた。……

東海地区には色々な大学が設置され、小生が大学一年の頃とは大分様子も変つてきたし、とにかく参加校がよく増加したものだと感心した。以前は私立と国立とでは体格に雲泥の差を感じたものだが、現在ではその隙差がないように思えた。しかし上背は同程度のものであつても肩から腰のあたりの肉弾は中京、愛大は抜郡で名工大など比ではなかつた。名工大もがんがん稽古し、よく寝てよく食べ体力をつけて欲しいものだ。……

試合場に入つてまず気がついたことだが、今回は名工大の柔道部旗がみられなかつた。この事は非常に淋しく感じた。忘れたのかどうか知らないが、部旗は三九年度の先輩諸氏が卒業記念に残していつてくれたものであり、今まで、どんな大会にも会場のある場所に姿をみせ、我々後輩を無言で励ましてくれたものだ。これからはいつでも部旗を掲げて名工大柔道部をアピールして欲しいと思う。試合結果については何も言う事はない。ただ試合内容について多小気づいたことがあるので言わせてもらう。試合とは日常の鍛錬の発表の場であると思う。だから、稽古でやつていない事は決して試合でできるものではない。試合中に奇跡が起つて原爆投げて相手を倒したとか、空気投げで一本取るといつたような大事は決して名工大柔道部の力量では起り得ないのである。むしろ試合では稽古の時の半分以上の力がなかなか出せないものであり、またそうさせる何か重苦しい雰囲気というものがのしかかつてくるのである。そういつたものを克服するには練習以外に何ものもない。練習を重ねる事によつて自信をつける以外に何ものもないのである。先日の試合で選手の中には戦う前からして相手の闘志に圧倒されていたものが多かつた。これは明らかに稽古不足が原因であり、相手と比較しての肉体的未熟、精神的弱さではないのである。勝利を得るためには、全員が一団となつて稽古

に、稽古を重ねることである。いつも同じ技ばかりをかけているのではなく、色々な技をどんどん試みることだ。単調単発ではなく連続してどんどん技をかける事だ、一に稽古、二に稽古三、四が無くて五に稽古である。

試合結果はそのときだけのものにするのではなく、次回の試合のための反省材料にして、稽古ではそれらを資料にして、稽古方法に工夫をもたらしより合理的に練習時間を最大対率たらしめるよう努力して欲しいものだ。名工大柔道部がより発展するためには一人一人が考えて柔道する以外に道はないと思う。とにかく道場は立派だから皆一団となってがんがん稽古に励んでくれ。

期待しています。

（工業化学　名工大大学院）

昭和四十一年卒

海老沢　秋　生

御手紙有難とう。我々の生活の中で柔道部だけが過去の生活を思い返してくれるのです。〃新人戦〃〃スポーツ会館〃〃合宿〃〃かめや〃等々……一語一語の単語が古い生活へ結びついてゆきます。こんな先輩もいるのだと思い、多忙とは思いますが、事有るごとに知らせて下さい。

四月二十二日の新人生歓迎コンパに出席し多数の新人生が入部した事を知り、昨年には待望の国立大戦に優勝した、この柔道部も、まだまだ大丈夫といった感を深くし喜んでいるしだいです。というのは我々の時代の後半から部員の数がへってくる傾向があったからです。なんといっても、部が発展するには、部員の数が多くなくてはなりません。

こうなってはじめて可能になります。

次に「心技」に先輩の事を載せるという試みは非常に良い事だと思います。この一回に終ることなく毎年続けていってもらいたい事だと思います。

最後に小生の事を書くと日本特殊陶業ＫＫ技術部に勤務し、目下会社に柔道部を再設しようと努力しています。そのうち新しく出来た工大の道場へ試合に行く事を夢見ています。色々勝手な事を書きましたが、最後に東海国立大戦に今年も優勝してくれることを、期待してペンを置きます。

ーさようならー

（窯業科卒）

原田　彰

いやだいやだと思い乍ら北海道に来て、早一年ダム建設事務所、設計係に配属になり乍ら、仕事はダム設計とたいして関係のなく、この一年をふりかえると、はて俺は何をしに北海道に来ているの

だろうという疑問しか、わいてこず、学生時代もっていた夢と現実実の違いを改めて認識させられました。

しかし他の面での北海道は仲々良く、夏は涼しく、冬はまわりの山ほとんどがスキー場となり、私は早速スキー道具一揃いを買い、毎日曜日、すべりに行き、北海道の冬を楽しみました。又北国の女性はうわさに違わず、美人が多く毎朝、楽しい思いで通勤しております。（役所には美人が少ないので）それに夏、ビール会社直営のビヤホールで飲む生ビールのうまさは北海道ならではの味だと思います。

さて現在、当地にも遅い春がやってきて、山々もボツボツ緑に色付き始め、雪の為、冬の間中止されていた工事も再開され、いよいよ本格的ダム工事が始まりました。

私も今年こそは何か印象に残る仕事が出来るのではないかと新年度に期待をかけて勤務しております。

（土木科卒）

三村雅彦

前略、工大を出てまる一年、急しい毎日を現場ですごしています。小生には柔道のお蔭で体力に恵まれているのが唯一の強みです。

後輩各位の努力が、試合で見事、実ることを祈ります。

（土木科卒）

昭和四十二年卒

竹中邦興

現在緑区　鳴海町上汐田六八中央発条ＫＫに勤務しております。一週間の新人社員教育を終え四月十日から現場実習に入っています。

私の会社は、バネを作っており、熱処理が主ですので昼夜連続操業をしています。

その為私達新入社員は二直三交代制の勤務で昼勤、夜勤を交互にくり返す、非常に不規則な生活です。柔道で鍛えた体で何とかやっている現在です。

（金属科卒）

浦久保　昌大

前略、皆元気でやっていると思う。小生も勝手がわからずとまどい乍も、どうにかやっている。電気卒にて、土方の集りみたいな所へ飛び込む物好きは、やはり少く、それでいて、やることはありすぎるので、毎日十一十一時迄残業を――半分強いられる様

な格好で――やっている。

勿論、日曜日毎の休みなんてもらえない。この間まで、猿投工場の新設機械のリモコン操置の組み立てをやっていた。

二十一日の試合、残念乍ら、見逃した。

なにしろ始めての休みにて、気持休まり、昼近くまで寝ていた上、日ごろからたまっていた洗たくに手をつけたものだから、とうとう行けなくなってしまった。これに、こりずに何かあるときはまた連絡を乞う。祈　繁栄

（電気科卒）

堀内　勲

前略、元気にはり切って、やっておられる由、何よりです。当分の間、試合は見に行けませんが、試合結果を出来ましたらお送り下さい。現在は非常に忙しいです。

では新人戦　夏期大会、全力で頑張って下さい。

期待しています。　さようなら。

（機械科卒）

第十五回東海学生柔道夏季優勝大会

五月十八日　於　スポーツ会館

名工大（三対二）愛教大

先吉田　渡辺
次高原　内殿　復本
三池田　内殿　○明保
四浜本○　間節枝　林
五佐能　合せ技　○新井
副久野○　手うち股　渥美
大樋田　服部

名工大（五対二）名市大

先吉田○　脊負い　畑尾
次高原㊀　優勢勝　石井
三浜本○　横四方固め　木村
四池田　手うち股　○伊藤
五西村　大外刈　○山田（雅）
副久野㊀　優勢勝　児島
大樋田○　払い腰　加藤

以上の様に、参加校を七つのブロックに分けたCブロックではトップとなりました。次にDブロックのトップである愛大と対戦。

昭和四十三年度　役員

主将　浜本利彦
副主将　吉田真治
〃　樋田哲也
主務　神谷均
道場管督　室清文
〃　高原二
愛柔連会計　加藤竜二
東海柔連理事　樋口順二
会計　近藤房男
渉外　西村源四郎
〃　北浜鎮夫

名工大　（一対四）　愛大

先　浜　本⊖　小内刈り　脇谷
次　樋田　×　井上
三　高原　大外刈り　○田京
四　久野　たて四方刈　○石垣
五　吉田　大内刈り　○山本
副　池田　×　中野
大　佐能　大外刈り　○諸山

で、見事に完敗しました。次に敗者復活戦にて、名工大、名城大とリーグ戦、次表の様に惜敗しましたが、この日は、十二時から、五時半迄で半日にて、五試合と、史上稀に見る試合でしたが、選手は良く健闘し、又部員共々応援しましたが、一位中京大、二位愛大、三位、名大、愛学院と、王座の座を奪われました。

名工大　（一対三）　名学院

先　吉田　優勢勝　⊖長谷川
次　加藤　優勢勝　⊖八木
三　池田　送えりじめ　○梅原
四　浜本○　大内刈り　岩瀬
五　久野　×　鈴木
副　高原　×　野村
大　樋田　×　青山

名工大　（○対四）　名城大

先　高原　大外刈り　○秋山
次　吉田　　加藤
三　池田　横四方　○山田
四　浜本　　竹部
五　樋田　　江上
副　久野　合せ技　○亀廻
大　加藤　ともえ技　○近藤

個人戦　五月十九日

第六回東海学生柔道体重別選挙権大会

浜本　○小外刈優勢　野川（中京大）
　　○小外刈技有　安達（愛学院）
　　○左内股体落合せ技　岩瀬（名学院）
　　○左内股優勢　加藤（愛大）
　　○ポイント優勢　江上（名城大）
　　延戦戦（脊負技有）　○青野（中京大）

中量級五五名のトーナメント試合にて、五人勝抜き、優勝戦にて、延長戦で惜敗、東海地区二位。

樋田　○払腰　小倉（愛大）
　　○優勢勝　大柳（静岡大）
　　体落　○荒井（愛学院）

軽重量級にて、三位。
久野無段の部にて優勝。

編集後記

夏草や、強者共が、夢の跡

以前千種分校であつたあたりを散歩してみたら、あのなつかしい旧道場はあとかたもなく、公園の中に恒和寮があるだけでした。

スプリングのきいた百二十畳もの新道場に移つて、早や一年近くすぎさろうとしています。有望な新人生を迎え、柔道部員も五十名近くなり、数々の試合を目標に、練習に励んでおります。

名工大という工科系単科大学の中の柔道部員が、日頃何を考え、いかに行動しているかを、解して頂ければ幸いと存じ、文集を編集しましたが、今号は、往年活動きれた先輩諸兄の声々を載せさせて頂きました。

これによつて、先輩諸兄の縦のつながりをよく強く、在校生も意識できたと思います。

実に歳の幅は四十年余り、それだけに内容のある小冊子となつたと思います。

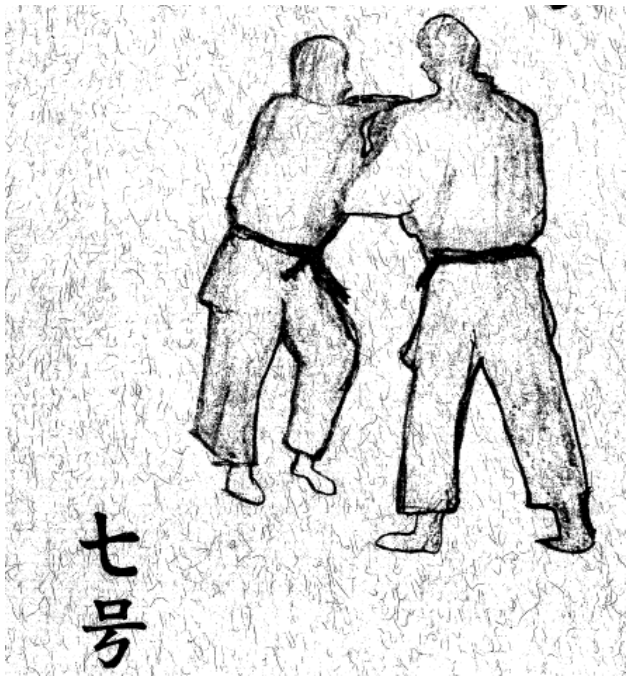
筆を取つて頂いた先輩諸兄の皆様に、心より御礼申し上げます。

巻末に先輩の住所を載せておきました。住所変更、又不明な所がありましたら、是非柔道部宛お知らせ下さるようお願い申し上げます。

北浜鎮夫

昭和45年7月発行

心技



七号

目次

巻頭の言……1
サロベツのほし草の中で……久野道夫……1
個人競技的クラブの問題点……加藤正剛……2
君はどうして……野瀬治雄……3
『?』1その二……佐能宗治……4
私の柔道観……安藤一義……4
分裂症……岸田豊……5
認識論……沢明……6
何故生きるのか……池田治朗……7
柔道で得られたもの……久野広明……7
幸保とおばあちゃん……星野幸吉……8
近ごろ考えている事……竹内新一……9
四月の鈴鹿山脈……坂倉忍……9
空……池田奨蛍……10
僕のパチンコ哲学……竹内哲治……10
トイレについて……島本英明……11
合宿で思うこと……岩佐誠司……11
吉野山中の出来事……小川正明……12
幻想……菊池芳男……13
めいのこと……安東一……13
『迷語』……尾崎幸博……14
散歩……高嶋俊男……15
試合結果……16
名簿……17
卒業生名簿……18
編集後記……27

巻頭の言

来年のことを言うと鬼が笑うと言うが、来年に安保、万博をひかえて、日本国中、議論と理論でわきかえっている。

そして、現在多数の大学で、各大学個別の問題はもとより、「社会と大学」、「大学とは何か」といった根本的問題についてもさかんに討論がなされている。そうした中にあって、以前にもまして、我々は社会に無関心ではいられず、主体的に社会に投企しなければならない状況にある。

しかし、社会を担うのは個人であり、社会と個人との不可分の相互関係に注意するならば、我々は社会と同様にとかく忘れられがちである個人の問題にも目を向けねばならないであろう。個人の問題とはさしあたって人格の問題であり、人格は柔道の問題である。

かの昔、屈指の柔道家、嘉納治五郎先生の言葉を反芻する必要がある。

「柔道は、心身の力を最も有効に使う為の道である。絶えまない練磨を通して攻撃と防御を習得することによって、人は心身の修養を積み、そして自分自身の中にその精神を具現する。これによって人はその人格を高め、世界に貢献する。これが柔道を志す者の究極の目標である。」

さて、我が名工大は明治三十八年三月二十八日、名古屋高等工業学校として創立していらい六十余年の歳月が流れた。そして、絶えまず人格の完成を目指して我が名工大柔道部もほぼ母校の歩みと歴史を同じくしている。その間、幾多の若人が名工大に入学し、勉強し、巣立っていった。名工大の歴史とは換言すれば、それらの人々の歴史であり、そして我々も今その歴史の一端を担っている。

そうした中にあって、現在名工大柔道部というもので結びつき、かつそれを構成している我々が日頃何を考え感じているかを記録しお互いに理解し合うという意味で今年もこの小冊子心技七号を発行することになった。お互いのより深いフレンドシップとコミュニケーションを願って。

――編集員――

サロベツのほし草の中で

A3 久野道夫

名古屋より海を越えて隔てること北方、千キロメートル余……八月の初めというのにまだ肌寒い北海道は天塩郡の豊に着いたのは夕方近くでした。

それから一時間余後。我々は生まれて初めて見る地平線に囲まれたサロベツ原野に立っていました。人間というものスケールが自然に比べて如何にちっぽけなものであるかという事を痛感しながら――――。我々をその原野のど真中までガタガタのトヨエースでつれていってくれた牧場のおじさんは淋しそうに言いました。「こんな広大な土地も皆湿地で使いものにならんのだ」しかしそこには本当

の自然があります。そして、今の一年生がもし北海道に行くならばその頃にもその自然はあるに違いありません。

我々は、その牧場のおじさんのところの牛小屋の二階に泊めてもらうことになりました。あのしぼりたての牛乳の甘さ、牧草地のかなたに浮かぶように見えた利尻富士、我々のカメラをいじくりまわして困らせた二人のがき ――――

我々は夜、ストーブの燃える部屋でおじさんと話をしました。おじさんは言いました。「オレは牛二頭から始めて十年で二十四頭と新しい家を得た。人間は辛抱しなきゃいかん。何事にも。君たち学生さんも ――――」話は続き一段落したところで我々は牛小屋の方へ行きました。

真暗な闇の中、やわらかい乾草の上にシュラフをひき寝ころぶと、それまで連日の土の上との寝心地の相違にすこぶる楽しい気持ちになりました。下では例の二十四頭の牛がゴソゴソ動いたいたりする音や鼻息がします。さきほどのおじさんの言葉の意味を考えながら私は眠りに落ちました。

個人競技的クラブの問題点

B3 加藤正剛

陸上競技、水泳、格技等、競技者個人の能力だけによって勝敗が決まってしまう競技を練習しているクラブには、チームプレーを主とする競技クラブとは違った運営上全体的かつ個人的問題が発生していると思う。練習は苦いものであり、どうしても休みたくなるものだ。その時に休んでしまおうと決定しやすいのがこの個人的競技である。つまり自分のポジションが無いため自已の全体に於ける価値が低いと思いがちであり又指導層もそうしがちであろう。だからつい自分一人が休んでもという気持になる、しかし誰れでも知っているように誰かが一人でも欠ければ練習が淋しくなる。又、こういう時によく大勢が休むことがあるのでなおさらである。だからといって休まず出て来させれば解決することではもちろんない。練習に出たい、やりたいという気持が起こらなくては本当でないことは誰しも承知のことだ。ここまで来ると問題はその競技あるいは練習が好きか、自分の肉体を苦しめことに快感を味わう者でなければならないことになる。だが単に自らの肉体を痛めて喜ぶものもやはり間違いではないだろうか。それは別にして、練習が好きになるためにはそれが楽しいものでなければならない。この楽しさも人によって受け取り方が異なるが、だらだらとしたなまぬるい練習を望む者は一人もいない。

なぜか私の言いたい事がらはずれてしまったが、柔道のように個人の競技であり、相手のスキを見つけて弱みにつけ込んで相手を攻撃するスポーツでは、練習に於いての勝ち負けで楽しくもなりつまらなくもなり易すい。このようなスポーツを団体で行なうには指導者の責任が非常に大であると考える。

『？』ーその二ー

Y3 佐能宗治

アベックで有名なT公園の夕暮れ時。彼は今日も一人で歩く。彼は考えた。「なぜあの女達は俺のものではないのだろうか。あいつらは決してあの男達のものではない。するとだれのものであろうか。神のものか、そうにちがいない。じゃあ俺も神のものだから、あの女も俺の物に違いない。」彼は猛然とアベックの一人にとびかかった。男は怒り「オレの女に何をするか。」と彼をぶんなぐった。彼は泣きながらつぶやいた。「どうしてあの女があいつのものなんだ、どうして－－－－！」彼はしかたなく一人去っていった。彼は芝の上で眠ってしまった。警官が彼を起した。「キミ、こんなところで寝てはダメだよ。ここは、みんなのもので、おまえの物ではないんだぞ」彼は言った。「何故、ここが僕の物でなく皆の物なんだ。皆のものなら俺の物でもあるんじゃないか。」しかし彼は警官のそのどついうでによってつまみ出された。彼はまたつぶやいた。「何故、皆の物があって俺のものは何一つないのだろうか。何故あの男があの女を抱いても何もいわないのに俺がやろうとするといけないのだろうか。あの女だって皆の物だから俺の物でもあるのに」彼にはその答は出す事が出来なかった。何故？何故？何故？

彼はそのうち自分の存在している場所がわからなくなった。それから何時間たっただろうか。彼はふと自分の足がなくなっていくのに気がついた。彼の足はしだいにとけていきそのとけた液体はやがて細い糸となり彼をつつみ出した。もはや彼の片足は消滅し、つぎの足もかかとから溶けていき、ついに彼の重心をささえるものはなくなり彼は倒れた。

そしてそこには真赤な夕日に照らされた赤い赤いマユだけがのこっていた。

合宿で思うこと

C1 岩佐誠司

僕にも一人の幼な友達がありました。

物心がついた頃から、遊ぶ時はいつも一緒、ケンカをしては一、二日口をきかずニラミあっているのにいつの間にか又一緒に遊んでいるといったごくごく普通の幼な友達でした。

幼稚園、小学校へ進んでも一緒に遊び、勉強し、又時にはケンカをしました。そんな時泣いて帰るのはきまって彼でした。

そんな彼とも中学へ進み僕が柔道部へ入ってからは、会う機会も少なくなり、一緒に話す機会も少なくなりました。

そのうち彼が体をこわしバス通学を始めますます会わなくなり、週四回の塾の行き帰りのわずかの間にしか話す機会はなくなりました。それで会った時は互い色々の話をし時のたつのを忘れました。

同じ高校へ進学しましたが、又柔道部に入った為一層会うこともなくなりました。

会うとバカの一つ覚えのように柔道のことである僕の話を楽しそうに聞き自分の好きなスポーツの話をする彼の顔はいつもの青白い顔を忘れさせるようでした。

そんな彼も僕か部の夏季合宿から帰った夕方一ケ月間ばかりの入院生活の末亡くなりました。

その夜会った時の彼の顔はドライアイスに囲まれ、病気の為むくんでいても、今にも「合宿はどうだった」と言いだす様な静かな顔でした。

その命日もあと二ケ月後に迫っています。合宿の始まる頃になるといつも彼のことを思い出すでしょう。

試合結果

第六回愛知県学生新人柔道優勝大会
5月4日　於スポーツ会館
名工大（四対一）大同工大
名工大（〇対六）中部柔整
名工大（一対四）名学院

第十六回東海学生柔道夏期優勝大会
5月十七日　於スポーツ会館
名工大（二対一）中日本自動車短大
名工大（一対五）愛工大

以上の結果のごとくまったくふるいませんでしたが、東海国立大戦、五工大戦の時には良い成果をあげるように努力をいたします。
五月二十三日の午後宿敵空手部とソフトボールの親善試合をして22対13で初勝利。

今後の試合予定
七月六日　全国国立大戦（於講道館）
七月一三日　東海地区国立大戦（於三重）
十一月十六日　五工大戦
十一月三十日　冬期大会

昭和四十四年度役員

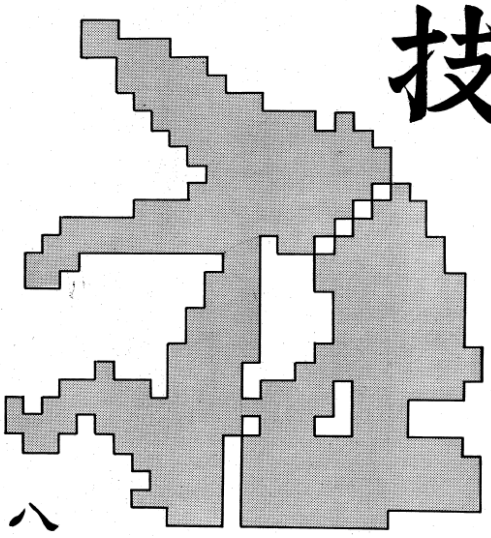
主将　久野道夫
副主将　野瀬治雄
〃　加藤生剛
マネージャー　佐能宗治
東海柔連　岸田豊
会計　安藤一義
渉外　沢明

編集後記

早いもので私達が新役員を引き継いでからもう半年以上経過しました。その間に名工大史上初めてという全学ストや変則授業などを経て、私達柔道部も少なからず影響を受けました。そうした中で編集したのがこの文集です。この文集を通じて、先輩諸兄との縦のつながりがより強くなり、私達柔道部員が日頃何を考え、いかに行動しているかを解していただければ幸いと存じます。
今年は名工大が主催して名古屋で五工大戦を十一月中旬に行う予定です。今、夏休みをひかえて部員一同、練習、開催の準備にと励んでいます。
巻末に先輩の住所を載せておきました。住所変更、又不明な所がありましたら、是非柔道部宛お知せ下さるようお願い申し上げます。

沢　明

心技



八号

昭和45年7月

目次

学歌・学生歌

巻頭言 …… 1

クラブとは …… D4 岸田 豊 …… 3

詩 ある瞬間 …… D3 池田治朗 …… 3

幹部紹介 …… E3 星野幸吉 …… 4

活動写真 …… C3 古橋公二 …… 5

寄り道 創作作品 …… D3 池田治朗 …… 6

春の花 …… E3 阿部典久 …… 8

雑感 …… E3 今飯田 哲 …… 8

キッネとタヌキ …… ES3 鯖部重久 …… 9

蟬 …… W3 西本昭二 …… 9

千里の丘にて …… ES2 菊池芳男 …… 10

入部の動機 …… K2 重野芳人 …… 10

麻雀 …… W2 竹内哲治 …… 11

友人について …… ES2 池田奨望 …… 11

「これでいいのか」 …… C1 川崎一司 …… 12

悩み …… M1 西尾広基 …… 12

下宿生活 …… C1 関谷文男 …… 13

美しさ …… A1 滝下英明 …… 13

永遠のねむり …… C1 片山和俊 …… 14

東京県人会（仮称） …… Mb1 福間洋二 …… 14

（読書） …… E1 折戸吉和 …… 15

柔道と僕 …… Mb1 寺倉幸雄 …… 15

雑感 …… Y1 横石章司 …… 16

試合成績 …… 17

第十七回東海学生柔道冬季優勝大会

第十七回東海学生柔道夏季優勝大会

昭和四十五年度役員 …… 19

名簿 …… 20

編集後記 …… 31

表紙カット 星野幸吉

巻頭言

人生は短い開花期と花のしぼむ長い時期からできている。

青春の季節に美しく華やかであることはたやすい。だが、花のない季節に美しくあることの方がもつと人生を幸福にさせるものかもしれない。

我々はなぜ大学へ来たのか

人格を高めるため

宇宙の総合的な真理を探究するため

人間味のある技術者になるため

技術者になりたいから

ただ勉強がしたいから

たゞ遊びたいから

本を読みたいから

自由が欲しいから

皆が行くから

親が行けというから

いいところへ就職したいから

柔道をやりたいから

我々はなぜ柔道をするのか

人間形成のため

なるべく多くの未知の人を知りたいから

かつこいいから

オリンピックを見て

原始的なスポーツだから

精神力を養うため

縦のつながりが欲しいから

男性美にあこがれ

練習のあとのあのダイゴ味を

味わいたいから

体を強くするため

体がでかいから

素朴なスポーツだから

男性的なスポーツだから

何か熱中できるものが欲しいから

真の友人が欲しいから

夢中になれるものが欲しいから

他のすべてを忘れる一瞬のため

姿三四郎にあこがれ

黒帯にあこがれ

女の子にかつこいい所を見せたいから

惰性で

苦しいから

楽しいから

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」

青年は青年らしくあればよい。

これが青年の権利であり義務である。青年らしいとは、高きものへの憧憬、価値あるものへの感激、深いものへの魅惑、魂を震わすものへの涙、これである。青年が青年らしい時、野中の一本杉の如くに、真直であり単純である。それが青年という年齢と境遇と釣合つて、調和の美を発揮する。

ク.ラブとは

D4 岸田 豊

昭和四十二年五月上旬のある土曜日。彼は何のクラブへ入ろうかと千種分校をウロウロ。空手部が気勢をあげているその側の小さな木造建の道場をチラリと覗いたその時、先輩の言われた一言が彼の大学生活の半分以上を決定してしまつた。「君、やつてみないかね」

何の目的もなく、単なる漠然とした気分の内に飛び込んでしまつた柔道部、毎日ただ、投げられる為にやつて来て、黙想の訪れるのを待ち焦がれた練習、道場へ向かう足の重く感じられた日々の連続、一片の喜びさえも感じられなかつた。一人、又一人と減つていく仲間達を見ながら、もしここでこの部を離れれば何か違つた人生が開けるのではないかと、彼は何度も考えた。それが実行に移せなかつたのは彼の小心のせいか、柔道の持つ不思議な魅力のせいか定かではない。そしていつしか、柔道部以外の別の 世界を追いかける姿から柔道とその柔道部自体を見つめる姿に変わつて行つたのはいつの事か覚えていない。これは決して技量上達云々といつた事の影響ではない。（最も彼は余り技量は上達しなかつた）

就職試験で東京へ出向いた折、偶然にも旅館で室蘭工大の柔道部員であつた奴と居合わせた。顔も名前も知らず、遠くで別々の生活を営んでいる奴と、数年来の友人の如く語り合えた事が、彼にクラブの存在を再認識させた事は疑いのない事実である。

詩――ある瞬間――

D3 池田治朗

鈍い衝撃のあとに
波うつ影
まい上がる
白煙に
身も心も全て
つつまれて
舞いる姫の
揺れる動の美に
唯ひたすらに
静かな愛がさわぐ
流れる黒髪の
陰影に
まぶしく寂光が
泥酔の心に
鋭敏につきさす
吐息が止む様
言葉は死ぬ
言葉の乾きに
愛の潤い
あゝ
静寂の時か
燭々の時か
炎の如く
それ自身としては
静かに

幹部紹介

E3 星野幸吉

鍋部・重久

何事にも徹底してやると言う。

なかくのニヒルで、〃柔道部一のスタイリスト〃と言う

主将になり以前とはガラッと変つて、ほとんど毎日出席。

阿部典久

身体は小さいが心臓はなかく強い。知らない女性に話しかける時などバツグン。

麻雀が好きで誘われて断わつた事がない。自分では読書、レコード鑑賞が趣味と言うが……。

彼が副将になつたのは、少しは出席率がよくなるのではないかということだ。これが適中。（アダ名 チビ）

池田治朗

何事にも積極的。一、二年はクラブに熱中。最近は他方面で多忙らしい。

趣味は女（あの手の顔で）、ボーリング、読書など。

（あだ名 タレ目、又はキンちゃん）

久野広明

明るくて、細かい事にもよく気がつく。三枚目を演ずるのが実にうまい。

プロレス観戦が好き。よく実演で見せてくれる。

マネージャーになり、クラブの為に骨身を削つて仕事をしている。少々口うるさいが、今年度最高の出来。

（あだ名 M・チエリ）

河村孝一

よく寝る。合宿中に気付くことだが、一日十二時間はコンスタントに寝る。

高校時代は野球をやっていて三塁で四番を打っていた。最近は年のせいか、あちこちが痛み見学が多い。

（あだ名　ヘーシング）

今飯田哲

非常にまじめで、クラブ、授業とも出席率一位。奇跡的に唯一人麻雀、パチンコをやらない。意外なことにダンスが好きで上手である。どこのダンパに行っても彼は必ずいる。

古橋公二

落ちついていて、まじめである。授業はたまに出る程度だが応力は軽くパス。まじめさを買われて会計になり、全員に恐れられている。

映画が非常に好きである。

（あだ名　童顔）

西本昭二

図体もでかいが態度もでかい。映画が好きで、特に、三本立てパートカラーの物は、主演・監督すべて知っている。

合宿中に聞くドスのきいた歌は有名。おかげで合宿中は常に睡眠不足。

彼の為に出来た練習監督という役はハプニングだが、彼に適役。

（あだ名　デバラ、又は極道）

山根司

エレキバンドのメタリクスにも加わり、ボーカリストとして活躍中。

長髪で、笑わねばかなりのいい男なのだが。

（あだ名　イモ）

中島

最近、又一段と横にスマートになってきた。

車の運転にかなりの自信を持っており、今年の工大祭ラリーでは、無計器で一三〇台中三〇位とか。

星野幸吉（他人評）

細かい事にはこだわらず、海のような大きな心を持っていて、いい意味でボケーとしている。顔、形は石坂浩二をがっちりしたようである。またユーモアがあり、それでいて中身は意外にまじめである、とのこと。

趣味は読書とクラッシック。後者では特にマーラー、ブルックナーに凝っている。指揮者ではフルトベングラー、ワルターが好きである。

（おそまつ　）

キツネとタヌキ

E3 鶴部重久

諸君はキツネとタヌキのお話を知つているだろうか。キツネとタヌキはバカすことで共通している。男と女の間もまたしかりである。女は男をだますためにムダな地ならしをし欲情をさそう（？）身なりをし、「貴方とならば」としらじらしい事を述べたまわるのである。さらに男は誰かのように「僕は北海道出身です。」と空々しい事を述べ立て女の気を引こうとするのである。しかし結局はだましてだまされた男女が一諸に暮らしていくのである。

しかし最近はキツネやタヌキの部類が多くなりましたなあ。

ほれ君の傍にもタヌキがいるよ。

試合結果

第十七回東海学生柔道冬季優勝大会
十一月三〇日　於　スポーツ会館

名工大　先　鶴部　内　股　○四井　愛知大学
次　今飯田　大外刈り　○四井
三　佐能　崩横四方　○四井
中　久野　╳　四井
五　野瀬　小外刈り　○三鴨
副　岩佐　かた固め　三鴨
大　加藤　背負投げ　○佐藤　他四名　○佐藤

名工大　先　池田　内　股　○亀廻　名城大学
次　岩佐　払腰　○亀廻
三　今飯田　内　股　○亀廻
中　久野　内　股　○亀廻
五　池田　横四方固　○亀廻
副　竹内　内　股　○亀廻
大　加藤　○亀廻　他六名

以上予選リーグにて二敗

一部・二部入替戦（トーナメント）

名工大　先　岩佐　合せ技有　○新井　名院大
次　池田　╳　新井
三　鶴部○合せ技有　坂本
鶴部　大外刈り　○早川
中　佐能　合せ技有　○早川
五　野瀬　けさ固め　○早川
副　加藤　╳　早川
大　久野　╳　岩瀬　他三名

昭和四十五年度　役員

主将　鶴部重久
副主将　阿部典久
〃　池田治朗
主務　河村孝一
〃　久野広明
道場監督　今飯田哲
〃　中島和夫
会計　古橋公二
練習監督　西本昭二
渉外　星野幸吉
〃　山根司

名工大　岐大
先　岩佐　安井
次　池田　安井
三　加藤　細目
中　佐能　○川島
五　飼部　川島
副　野瀬　○川村
大　久野　川村
他三名

以上入替えトーナメントにおいて二敗。この結果名学院が一部入りし、名工大は二部落ちしました。

第十七回東海学生柔道夏期優勝大会
五月十日　於、スポーツ会館

名工大　名商大
先　飼部　松家
次　星野　上四方田　○山口
三　阿部　上四方田　○西川
中　今飯田　田原
五　池田（奨）　鈴木
副　池田　大内刈り　○塩崎
大　竹内　横四方固　○森川

名工大　三重大学
先　阿部　伊藤
次　中島　大外刈り　○比屋根
三　飼部　山本
中　池田（奨）　中川
五　今飯田　長坂
副　竹内　浜田
大　池田（治）　喜屋武

名工大　静岡大学
先　川崎　横四方固　○梶原
次　中島　鈴木（壮）
三　阿部　米浦
中　今飯田　内股　○田川
五　池田（奨）　背負投げ　○片山
副　竹内　○けさ固め　喜多
大　池田（治）　左つっ込　○鈴木（正）

対名商大学　四敗三引分け
対三重大学　一敗六引分け
対静岡大学　一勝四敗二引分け
で、第四ブロックにて見事に完敗
一位　中京大　二位　愛学院　三位　名大

今後の試合予定

七月　五日　全国国立大戦（於　講堂館）
七月十二日　東海地区国立大戦（於　名鉄体育館）
十一月十五日　五工大戦（於　名工大）
十二月　冬季大会

編集後記

今回は最初に学歌、学生歌を載せました。なじみが薄いが、なにか親しみのあるこの歌を口ずさめば、学生時代がなつかしく思い出されるのではないでしょうか。

今年は日米安保条約の固定期限が切れる年であり、大阪で万博が開かれています。又、部に於ては昨年東海学生柔道で名工大は二部に落ち、延期されていた五工大戦が我が校で開かれる年でもあります。そんな中でこの〃心技〃八号が出来ました。

およそ文学には縁のない我々の書いた文章です。日頃我々が何を考え、何をしているのかを解していただければ幸いです。

尚、五工大戦は十一月十五日（日）、名工大体育館で行れる予定です。部員一同、練習、開催準備にと励んでおります。

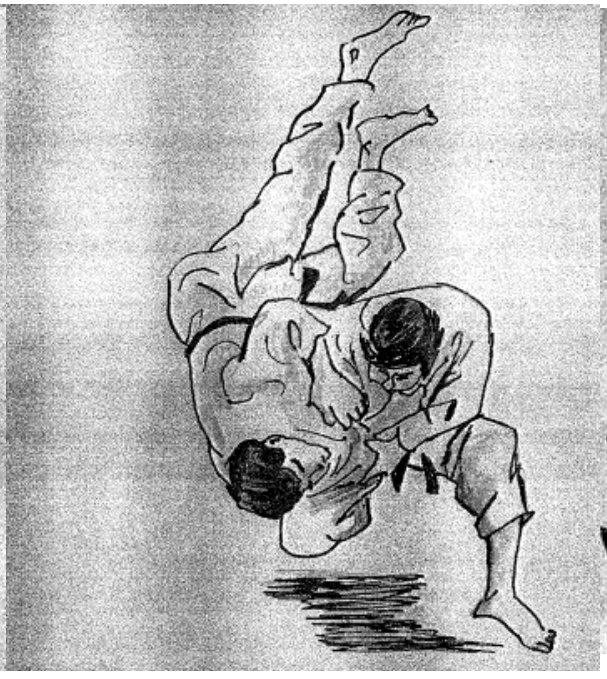
住所変更、又不明な箇所の住所を御存知の方は、是非柔道部宛お知らせ下さるようお願いします。

星野幸吉

昭和46年8月

心技

九号



目次

◎巻頭言

◎別れのことば

大学共同体と自己 …… D4 池田治朗 …… 1

柔道と大学生活 …… Es3 池田奨瑩 …… 2

二人の大学生 …… W3 竹内哲治 …… 2

私の柔道歴 …… C2 岩佐誠司 …… 3

つたなき日記より …… Es3 菊池芳男 …… 3

三年前期 …… K3 重野芳人 …… 4

無題 …… Mb2 福間洋二 …… 5

この頃思うこと …… A2 滝下英明 …… 6

柔道二年生 …… Mb2 西尾廣基 …… 6

柔道クラブ主催 …… E2 折戸吉和 …… 7
講演会を行なつて

一風変つた友 …… C2 川崎一司 …… 8

月曜日、五六時限目 …… C2 関谷文男 …… 9

無常に生きる …… Mb2 寺倉幸男 …… 9

しいの実の味は? …… C2 片山和俊 …… 10

名古屋雑感 …… E1 松島寿一 …… 11

仮装 …… K1 酒井俊広 …… 12

パチンコ学入門 …… W1 湯川重男 …… 12

酒と僕 …… C1 川崎恭史 …… 13

期限切れ〇分前 …… C1 藤井尚之 …… 13

人間の住める都市・鳥取市 …… Ma1 天野伸二 …… 14

入部の動機 …… Mb2 高阪義男 …… 15

ヤマモモの思い出 …… E1 今井伸明 …… 16

試合結果 …… 17

昭和四十六年度役員 …… 19

◎名簿 …… 20

編集後記 …… 34

巻頭言

毎日毎日雨ばかり降り続いている。

このじめじめしたむし暑い下宿の一室に於て、私は今、心技に載せるべく、O・Bの名簿を訂正しているのである。

昭和二年卒業の年配の方から、今年卒業された先輩まで、その数百八十人余り。

住所、会社名、出身学科。それらを一つ一つ原稿用紙に書込んでゆく。

北は北海道に行つている人から南は沖縄まで。会社の取締役社長と名のつく人から、すでにこの世を去つた人。全国各地に散在し、様々な人生を送つている人達。

その人達総てが、かつては今の私と同じ名工大柔道部の一員であり、毎日汗水をたらして練習に励んでいた時があつた。

すぐに私もこの欄に載り、今の二年生が載り、一年生が載る。

時の流れは容赦無く、私達を前へ前へと押しやつてしまう。

かつての大学生活の思い出も心の片隅に押しやられ、次第に色褪せてしまうのであろう。

社会の荒波がそうさせるのか、家庭を持つ喜びが、それを強制するのかは、今の私には明らかではない。

けれどそんな時、この小冊子が届けば、どれぐらい嬉しいであろうか。

汗臭い部屋。

乱雑に壁に掛かつている、真黒に汚れた柔道着の数々。

急救箱の真青なヨードチンキと真白な包帯。

コンパの時のビールの苦さ。

そして練習後のあのそよ風が、もしもこの少冊子から感じ取ることができれば、どれ程素晴しいであろうか。

また次第に消えつつある先輩、後輩間のコミュニケーションの一端を担うことをも願いつつ、この心技第九号の完成を急いでいる。

―編集者―

別れのことば
追い出しコンパより――於初寿司

○今まで三回追出しコンパに来たが、こんなに早く、自分も追出されるとは！
就職は藤田工業に決定。土方の親分にでもなるつもり。
初任給は四万ー四万五千円ぐらい。

久野道夫

○就職は帝国化学工業に決定。酸化チタンなどを造つていて、工場は大阪と岡山にあり、どちらに行くかは未決定。

高原喬二

○今は卒論で忙しくて忙がしくて。就職は野瀬君と同じ神電気。
結婚は、三〇までかそれ以後かで、悩む。

加藤正剛

○川崎重工業に内定。多分、神戸に行くのではないか。
みなさんも、これからファイトを燃やして元張つて欲しい。

安藤一義

○三菱に決定。希望任地先は神戸。美人多し。

神戸で穴場を捜しておくので、金ができれば、遊びに来ること。

沢明

○まだ二年間、余分に名工大に残ることになつた。
マージャン、パチンコは積極的に指導する。

佐能宗治

○不幸なことに加藤と同じ神電気に決定。
工場は東京にあるが、田舎に行きたい。あまり柔道は、やりたいとは思わない。でも みんなは元張つて欲しい。

野瀬治雄

○ブリヂストンに決定。これから元張れよ。

岸田豊

最後に柔道部恒例のバンザイ三唱
今後の柔道部の発展を祈つてバンザイ。 久野
どうか かわいいお嫁さんが 僕のものになりますように
バンザイ。

加藤

これで追出コンパは、無事終りましたが、やはり、分れというのは物悲しいものです。

大学共同体と自己

D4 池田治朗

私たちの存在というものは何か！又如何なる意味をもち、如何なる責任が問われるのか。社会的存在としての自己が、大学共同体の積極的、消極的加担者、構成員として現実に存在している。一種の幻想性をもつ大学ではあるが、虚構の世界ではない。社会の知的生産、再生産の場であるはずだ。私たちが、技術、科学等々の知識を自己の労働力商品とし、若干の肉体的労働との間に優越性をもちながらも、結局のところ同じ疎外の道を歩むのは何故か。

大学の中はいつも空虚の風が吹き荒れている。教室の中は穴倉の如く湿つぽく、私を陰気にしてしまう。本の活字が唯無意味に目にうつる。そして、無目的な試験はこれ程、私たちを馬鹿にしたことがあるだろうか。実験室は汚れた空気が充満し、私の心の中の怒りの念を奮い起たせる。そのとなりにかまえた教授の部屋。権威の象徴の様に。こんな逸話がある。姫工大の教授が京大へ行つた時の話である。その教授が帰つてきて学生に語つたことには、「京大の教授は偉い。」どうしてかというと、「京大の教授は私を一歩も教授室に入れてくれなかつた。私はドア越しで彼と話てた。実に彼は偉い。」実にくだらない権威意識ではないか。その様な教授がさももつたいなさそうに自分の知識を学生に与える。そしてその事によつて優越性をもちたがる。そんな体質が私たちの中にも入つてきている。ま、人間てのはそういつた意味のない満足意識で自分を慰さめているのかな。大学共同体の中で共同体への意向もなしに、そして自己の立場性を認識し得ないで、小さな幸福を無展望に夢見ている。そして一定の安定への道を獲得するために、ひたすら授業をうけている。そして、その学問への意欲、就職して働くことへの意欲を、必死に裏づけ、自らを慰さめ、自らの荒されない墓穴を掘るために、現実的疎外を忘れようとしている。

私たちは、政治的存在であることも忘れてはならない。私たちが逃れようとするならば結局のところ支配され、全存在を労働力商品として酷使され、スクラップ化されるまで使われ、捨られるのがおちなのだ。私たちが、いくら目をつぶり、知ることから避けようとも、事実は事実として現実に存在しているのだ。そして私たちの場所的立場の規定性から知らないと言いうることは犯罪的でさえあるのだ。知ることから避け、幻想性をもつことからは、疎外の解放の道はありえない。私たちはその幻想性の否定、脱却し、自己の存在、そして知ることの意味、大学、学問への問いかけ、そして社会的、政治的存在への認識から出発しなければならない。

私の柔道歴

C2 岩佐誠司

中学へ入学すると同時に始めた柔道も今年で足かけ九年になります。

小学校の三、四年の頃から肥り始め、中学へ入学した時には六十キロを越えていた私は、練習、とくに基礎練といわれる〃腕立て伏せ〃や〃腹筋運動〃ができず、ともすれば休みがちでした。それに汗で臭くなつた柔道着を着て畳の上を転り回るのは、決して楽しいことではありませんでした。

高校に進学してその激しさも増し、中学から一緒に練習してきた友人が、一人二人と止めてゆくのを見るにつけ、幾度となく止めようと思いました。しかし、止めもせず今まで柔道を続けたのもやはり〃友人〃のおかげでした。

よく　学生時代の友人は、一生の友人となる。　と人に言われますが、最近、遠く離れた高校の友人からの手紙を読むとき、つくづく本当だと思います。

今の柔道部には、遠くから来ている人や、初めて柔道をする人がいますが、一刻も早く、信頼しあえる友人を作り、柔道部になじみ、〃柔道〃というより〃柔道部〃を楽しんでせめて大学の三年間楽しく過して欲しいと思います。大学の柔道部は先生や学校のものではなく、学生自身の柔道部だからです。

酒と僕

C1 川崎恭史

二ケ月程前から俺と酒との親密（？）な付き合いが始まつた。（始まつたというのは少々おかしいかもしれない。以前には隠れて飲んだこともあつた。）多分、否、絶体にこの付合いは柔道と同様に一生続くものと確信できる。

こんな事を書くと、これを読んでくださる方々は僕を相当の酒好きであると想像されるでしょう。正直、酒は嫌いではない。むしろかなり好きなようです。しかし、以前から別に酒を飲んでもうまいとは思わなかつた。特に洋酒やビールなんかはただニガイだけでなにゆえ世の人はこんなものを飲むのかと純粋に疑問に思つていました。入学当初、付き合い（先輩や友人との…。）や好気心もあつたし、また子供くささからいささかでも脱皮しようとするあがきからか、その頃はしかたなく飲んだものです。しかし飲む事がたび重なるにしたがつて（部や科のコンパでむりに飲まされた事もあつたが。）相当鍛えられたのか、今では日本酒の熱カンや安い洋酒なら（安いやつしか飲んだことがないのだ。）何の抵抗もなしに飲めますし、少しばうまいと感じるようになりました。（ただし、まだ一級酒と二級酒の区別もつきませんし、もちろん味を楽しむとまではいきませんが……。）

余談ですが（文章全体が余談みたいなものですが…。）僕の親父も母方の祖父も酒好きである。（親父は柔道三段。僕が柔道を始めたのもかなり親父の影響があつたように思う。同様に酒にしてもそうであろう。）僕の地方（紀州は潮岬の近く）では家系の中に大酒飲みのいることを『酒飲みのツル』がいいと言います。僕の場合はさしずめこれですね。

話は変りますが僕が持つている理想の男性像には少々酒が飲めるという事が必要不可欠な要因です。とにかく、幸か不幸か入つた所が土木科で柔道部、まあどう転んでも卒業までには大酒飲になることは間違いないでしょう。僕と酒との縁はいわば宿命というものでしょうかね――――。

後記

〃切当日に書いたものですから、読みづらい点は大目に見て下さい。何ともまずい文章ですが最後まで読んでいただきまして、どうも……。

結局あなたも暇なんですね――――。

試合結果

第八回愛知県学生柔道新人優勝大会

五月二日　於　愛知県スポーツ会館

名工大　　中京大
先　滝　下　押え込み　○中　島
次　関　谷　内　股　○木　村
三　川崎㈠　体落し　○林
中　福　間　合せ技　○徳　島
五　川崎㈱　足払い　○川　野
副　寺　倉　奥りえり絞め　○青　山
大　西　尾　ぼね腰　○紫　山

名工大　　名　大
先　滝　下　足払い　○伴
次　西　尾　×　大　坪
三　川崎㈠　×　小　西
中　福　間　×　佐　竹
五　川崎㈱　○払い腰　増　野
副　寺　倉　×　松　井
大　片　山　○大内刈り　伊　藤

名工大　　愛学院
先　滝　下　くずれけさ固め　○吉　原
次　関　谷　上四方固め　○木　原
三　川崎㈠　背負い投げ　○下　村
中　折　戸　上四方固め　○藤　田
五　福　間　横四方固め　○伊　藤
副　川崎㈱　送り足払い　○鈴　木
大　寺　倉　大外刈り　○百　地

対中京大学　七敗
対名古屋大学　二勝一敗四引分け
対愛知学院大学　七敗
第二ブロックに於て、名大には勝利を得ることができました。
一位　中京大　二位　中部柔整

第十九回東海学生柔道夏期優勝大会

五月十五日　於　愛知県スポーツ会館

名工大　　名市大
先　滝　下　○けさ固め　伊　藤
次　重　野　内　股　○桜　井
三　川崎㈠　○内　股　鈴　木
中　池　田　○内　股　原　田
五　川崎㈱　×　永　戸
副　寺　倉　○大外刈り　李
大　竹　内　○内股返し　鈴　木

名工大　　大同工大
先　滝　下　小外刈り　㊀佐　藤
次　川崎㈱　×　石　伐
三　池　田　×　田　村
中　川崎㈠　合せ技　○宮　田
五　竹　内　大外刈り　○鈴　木
副　寺　倉　○大外刈り　深　見
大　片　山　○合せ技　鈴　村

対名古屋市立大学　五勝一敗一引分け
対大同工業大学　二勝三敗二引分け
今年から夏期大会も、二部制が採用され
Ⅱ部　Bブロックに於て大同工大が勝ち進みました。
一部優勝　中京大　二部優勝　中部柔整

第十三回全国国立大学柔道優勝大会

七月四日　於　講　道　館

名工大　　横浜国大
先　滝　下　×　野　村
次　重　野　大外刈り　○吉　田
三　川崎㈠　×　佐　藤
中　関　谷　体落し　○宮　城
五　岩　佐　ひざ車　小　提
副　竹　内　㊀左小外刈り　小　林
大　片　山　㊀大内刈り　高　橋

名工大　　奈良教育大
先　滝　下　㊀背　負　鵜　海
次　川崎㈠　大外刈り　○熊　谷
三　片　山　内　股　○東
中　竹　内　○内　股　西　田
五　重　野　○背　負　勝　広
副　菊　池　○横四方　辻
大　西　尾　×　岡　沢

対横浜国立大学　二勝三敗二引分け
対奈良教育大学　四勝二敗一引分け
で、第三ブロックからは、横浜国大が、勝進みました。

第二〇回東海地区国立大学柔道大会

七月十一日　於　岐山高済士館

名工大		岐阜大学
先　滝　下	背負い	㊀伏　屋
次　菊　池	体落し	㊀市　原
三　川崎(鉄)	肩　車	㊀小　林
四　関　谷	╳	鎌田(鉄)
五　川崎(一)	払い腰	○藤　森
六　岩　佐	╳	小林(治)
七　竹　内	○返し技	森　川
八　寺　倉	体落し	㊀川　島
副　重　野	背負い、押え込み	○板　津
大　片　山	╳	佐　藤

名工大		愛教大
先　竹　内	╳	浜　嶋
次　岩　佐	╳	二　宮
三　寺　倉	けさ固め	○水　谷
四　川崎(鉄)	はね腰	○新　井
五　川崎(一)	╳	丹　羽
六　西　尾	╳	伊　藤
七　菊　池	○内股すかし	谷　沢
八　関　谷	○背負い	杉　浦
副　滝　下	○背負い　技有り二本	西　川
大　片　山	㊀小内刈り	明　保

対岐阜大学　一勝六敗三引分け

対愛知教育大学　四勝二敗四引分け

第二ブロックからは、岐阜大学が勝進み、三重大学との対戦の結果、岐阜大学が優勝致しました。

今後の試合予定

十一月二十一日　五工大戦　(於東工大)

冬季大会の日程は、分かり次第、連絡致します。

昭和四十六年度　役員

主　将	岩佐誠司
副主将	竹内哲治
主　務	菊池芳男
会　計	池田奨瑩
渉　外	重野芳人

編集後記

三年生五人。これが今年の柔道部を率る人間の数です。かつて無い程、部員数の面でも、又、体格などの面でも大きなハンディを背負っている我々ですが、それはそれで、クラブとしての団結力は一層強くなっているように思えます。

工大祭には、初めての試みとして模擬店を出し、二万円余りの利益を上げ、秋には映画会の開催を計画中です。

今は目前に迫った全国国立大戦及び東海国立大戦に備え、練習に励んでいる我々です。

こういう状況の下で書かれた心技ですから十分時間もかけることができず、拙文ばかり、並べたてましたが、少しでも我々の活動状態、物の考え方などを察していただければ、幸いです。

最後に、住所欄の訂正につきまして丁寧な返事をお送り下さいました先輩諸氏には、心からお礼を申し上げます。

重野芳人